

# キャロライン妃の大陸旅行とミラノ委員会

古賀秀男

## はじめに

ナポレオンによる戦乱が終結した一八一四年七月二十五日、イギリス皇太子妃キャロラインは首相リヴァプール宛に次のよきな手紙を送つた。それは長年にわたつて奪われてきた摂政殿下ジョージ（夫）と彼女の間の平和を取り戻すために、また世継ぎの娘シャーロットがオランエ公嗣子との縁談を断つた理由の一つに母親の現在の不安定な状態があり、その障害を解消させるために、イングランドから出国し故郷の弟ブラウンシュヴァイク公のもとを訪ね、さらに大陸を旅行する決心をしたと述べ、さらにこのほど議会が彼女への供与を認めた年間五万ポンドの歳費は返上し、従来の三万五千ポンドを受け取ることや、現在の住居の後始末についても言及していた。<sup>(1)</sup> リヴァプールは七月二八日付の返信で、手紙を摂政殿下に見せたところ、殿下は皇太子妃が出國し実家のブラウンシュヴァイクを訪ねるほか、自分が気に入った所で旅行し住居を構えることに異存はない、またシャーロット妃とオランエ公嗣子との縁組が破談になつたのは皇太子妃のせいではない、またケンジントン・パレスの妃用の居室は現状のままでしておいて差し支えない、との意向であつたと書き送つた。<sup>(2)</sup>

返信を見て小躍りしたキャロラインは、ジュネーヴ滞在中の元女官レイディ・シャーロット・キューベル（のち旅行中にしばらく妃の女官を務める）宛に、「終わり良ければすべて良し、好きなところで誰とでも会えるようになる、私は本当に幸せ」と書いた。<sup>(3)</sup> すでに出国の準備を整え、二五日にはロンドンの住居コーンノートハウスを引き払つていたキャロラインは、八月九日サセックス州ワーシングからフリゲート艦ジェイスンでドイツに向けて出國した。同行者は侍女、侍従、召使いなど十人ほどであった。<sup>(4)</sup> 一七九五年四月に従兄のジョージのもとに嫁いでから一九年余りの歳月が流れ、彼女はすでに四六歳であつた。

できません。また一人の私人としても、公私いずれの場にも私が姿を見せるのは我慢できないと言われており、それほど君主「夫」から嫌われているのです。皇太子妃としてそのような不名誉と屈辱に耐えることはできません。摺政殿下とその同族が、「一八〇五年以来」敵対者や裏切り者たちの間違った非難にそつて、私に対する不義の罪などまったく濡れ衣であることは内閣と議会が公認しているにもかかわらず、私を罪人扱いしていることももう耐えることはできません」

(5) ホイットブレッドは妃の決断を聞いて驚きはしないが、妃を囲む暖かい社交の場が失われるのは大きな苦痛だと答えた。<sup>(6)</sup>

この年六月には対ナポレオン戦争の勝利を祝つてロシア皇帝、プロイセン王ほか列国の君主、指導者がロンドンに集まつたが、キャロラインは夫と王妃から宮殿応接室への立ち入りを一切禁じられ、また夫からは公私いずれの場でも二度と会わないと申し渡されていた。<sup>(7)</sup> さきのリヴァプールの書簡では列国の君主らが妃を訪問することに摺政殿下は何の妨害もしなかつたが、彼らの方が訪問せずに帰国した、という夫の証明が書かれていた。<sup>(2)</sup> このようにのけ者として厄介払いされてきたキャロラインが、イギリス王室との國を捨てる気持ちになつていたことは明らかであり、シャーロット妃への思いを残しながら、決別に踏み切つたのであった。

だが彼女は夫がジョージ四世として即位したのち、住み着いていたイタリアからほぼ六年ぶりに帰国した。それゆえ「出国」は結果として長期の大陸旅行となつたのだが、なぜ彼女は帰国を決意し、実際に帰国することになったのか。彼女は出国の際「虐げられた」(injured)皇太子妃の屈辱としがらみから解放されると小躍りしたが、その判断

は甘すぎた。摺政側は彼女を厄介払いした上で、その身辺にスペイを

46

送り込んで私生活を偵察させ、離婚のための口実を探し求めていた。偵察活動は、イギリスから同行したキャロラインの侍従、侍女たちが相次いで帰国し、その代わりを現地で採用し始めた時期から活発になる。やがてキャロラインが、従者として雇い入れた元軍人のイタリア人バルトロメオ・ペルガミ（またはベルガミ Bartolomeo Pergami, Bergami）と親しくなつたとの噂が広がる。離婚の口実をつかみだす。摺政は、一八一八年には法律家をミラノに派遣し、外国滞在中のキャロラインの「不義」をあばく目的で内密に調査させることにした。当時キャロラインはアドリア海岸ペーザロ近郊に住居をおいていたが、このミラノの動きを伝え聞いてオーストリア政府に止めさせるよう請願も送つた。<sup>(8)</sup> この内密の調査が彼女の関心をイギリスへ引き戻し、やがて帰国を決意させるのに大いにかかわることになった。

本稿の主題の一「ミラノ委員会 (Milan Commission)」は、一八年八月このようにして生まれた。委員会はイギリスから派遣した二人の弁護士とウィーンのイギリス大使館付き武官の三人からなり、それにイタリア人弁護士一人を加え、ミラノに事務所をおく、六ヶ月にわたつてキャロラインの元侍女、従者や出入りの職人（すべてイタリア人、スイス人からなる）などを証人喚問し、大量の尋問調書と報告を作成し「緑の袋」(Green Bag)に入れて持ち帰つた。この書類が基礎となつて一八二〇年、「王妃に対する刑罰法案」(The Bill of Pains and Penalties against Her Majesty) がなわち「キャロライナ・アメリカ・エリザベス王妃からの」の王國の王妃としての肩書き、大権、権利、特権及び免除特権を剥奪し、国王とキャロライン・アメ

リア・エリザベスの結婚を解消させるための法律」を貴族院に提出し、採択させようとする、イギリス議会史に汚点を残す「裁判」(trial)が行われたのである。<sup>(9)</sup>

ミラノ委員会の活動とその調査・報告は、それゆえ「裁判」の詳細を記録した議会討議録や『タイムズ』の記事以上に、その原典に当たるものとしてキャロライン王妃事件の核心を語るきわめて重要な史料である。それゆえこの事件を扱う研究者は同委員会に大きな関心を寄せ、通常の場合、貴族院における「裁判」との関連で論究されてきた。研究史の冒頭に位置するイタリア人研究者クレルチ『分別のない王妃——イギリス王妃ブラウンシュヴァイクのキャロラインの悲劇』(イタリア語版一九〇四年、英訳版一九〇七年)は、いくつかの明らかな誤りを含んでいるが、イタリア側の史料調査に重みがあり、イタリアにおける彼女の足跡やペルガミの晩年など、本書によつて初めて明るみに出たことも少なくない。しかしシャーロット妃をキャロラインの私生児とするなど、偏見に取りつかれた大きな誤りがあり、全体のバランスも欠けている。<sup>(10)</sup> クレルチを意識したマルヴィルによる二巻本の大著『虐げられた王妃——ブランドウィックのキャロライン』(一九一二年)は、全巻を書簡史料で詳細に語らせており、参考すべき箇所が多く史料的価値がきわめて高い。<sup>(11)</sup> ただ、ひたすら書簡で語らせただけに、抜け落ちた空隙があるのは事実である。パリーによる『キャロライン王妃伝』(一九三〇年)が、ミラノ委員会に先立つオムブテーク男爵らによるスペイ行動を重視し、「ミラノ委員会の完全な歴史はまだ書かれていない」と述べたのは正鵠を射た主張と言える。

その後刊行されたキャロラインの評伝、研究書は枚挙にいとまないほどだが、妃の旅行と大陸在住時とミラノ委員会に関する研究には深化が見られなかつた。<sup>(12)</sup> その間に上梓されたアスピノール編の皇太子ジョージ及びジョージ四世の書簡集計一巻は、ミラノ委員会に関連する書簡やメモも相当数収録しており、実態の解明に少なからぬ貢献をした。<sup>(13)</sup> その水準を大幅に引き上げたのは、フレイザーの新著『御しがたい王妃——キャロライン王妃の生涯』であり、ウインザー王室文書館の所蔵史料を駆使して、「悩み苦しんだ王妃と彼女を悩ませた人にについて、率直ではあるが同情を込めた肖像』を描き出した。<sup>(14)</sup> だがこの新著でも、ミラノ委員会の調査に関する比重のおき方、及びその前提となるオムブテーク男爵らによるスペイ活動についての分析・論述は不十分であり、とくに反王妃側の重要な証人となる召使いサッキとデュモンが、敬愛していた女主人を裏切つてなぜ証言するに至つたのか、は何ら解説していない。サッキとデュモンの問題は、王室文書館所蔵の王妃側史料の検証によつて本稿が初めて明るみに出すことになるが、この検証がなければ彼らの証言を信用するほかないのであろう。

N・スワイートは最新の論文で「王妃の裁判に連なつていく秘密の活動の物語は、大部分はまだ語られていない」と言い切つてゐる。もつともスワイートが明らかにしたのは、ミラノ委員会の一人ブラウン大佐にかかるところのみであった。<sup>(15)</sup>

本稿では、大陸旅行の初期からのキャロラインに対する身辺調査の実態と、ミラノ委員会とその証人たちの実状を具体的に確認しながら、キャロライン王妃事件の前提になる「不義」「密通」がいかなる実態のものであつたか、その根拠となる証言がいかに虚構性をもつも

窓 のであつたか、を可能な限り明らかにしてみたい。

## 史 一 キャロライン妃の大陸旅行と従者たち

1 ブラウンシュヴァイクからイタリアへイギリスへの想い、ペルガミとの出会い

キャロラインの出国をめぐって、「虜げられた」状態からの解放という喜びとは裏腹に、深刻な懸念も吹き出していたことにまず注目したい。すでに一八一三年三月以来、キャロラインの支援者ホイットブレッドらは、彼女に対する「不義」の濡れ衣問題（一八〇五～六年）や不相応な待遇の問題を庶民院に公表し、彼女を支援する論議を巻き起こしていたが<sup>(17)</sup>、列国代表が戦勝を祝賀してロンドンに集まつた一四年六月、キャロラインが摂政に宛てた手紙とその返信に当たる王妃がキャロラインに宛てた手紙を庶民院で公表した。王妃の手紙は、キャロラインの宮殿応接室への立ち入りを禁じる、及び摂政は公私いずれの場でも彼女とは会わないという、摂政の「確固たる不变の決定」を本人に代わって彼女に伝えたものであった<sup>(18)</sup>。出国の有力な原因の一つが、このような夫と王妃（義母）による冷酷な仕打ちにあつたことは、ホイットブレッド宛の前述の手紙で明白である。だがそのホイットブレッドとブルームが、彼女の出国の決心に水を差すような懸念を伝えてきた。

それは次のような警告であった。彼女が長期間イギリスを留守にすれば、摂政が再婚でき、新たな王子を得られるように、摂政と内閣がキャロラインとの離婚を押し進め、シャーロットの王位継承権を剝奪するという問題が起これ得る。そうなればイギリスは混乱ないし内乱

におちいり、キャロラインは騒乱の責任を問われることになりかねない、というものであった。すでに出国のためワーシングに滞在しているキャロラインは、与党の有力者キャニング宛にホイットブレッドからの警告の主旨を伝え、自分が身を引いて出国するのは「摂政殿下、シャーロット妃、この國、及び私自身の平和と静穏のため」であり、もしホイットブレッドらが懸念するような事態が起これば、自分と娘の権利を護るために直ちに帰国することになる、この手紙を首相にぜひみせてほしい、と書き送つた<sup>(19)</sup>。キャニングの返信では、首相はそのような懸念が現実化するとは考えられないと述べたとし、また必要があればキャロライン妃はいつでも遠慮なく帰国できる、と書かれていた<sup>(20)</sup>。この懸念について、キャロラインは出発直前の八月七日、レイディ・キャムベル宛の新たな手紙の末尾に、「私はこの出国のことでホイットブレッドとブルームによつてひどく悩まされています。でも他言は無用に」と書き加えた<sup>(21)</sup>。イギリスに決別しようとしているキャロラインの心の片隅に、もし皇太子妃・王妃の地位が脅かされる事態が生じたときには帰国する、という考えが出発時からあつたことに注目しておきたい。

キャロラインが一四年八月九日にワーシングを発つたとき、彼女の同伴者は女官のレイディ・シャーロット・リンゼイ（ノース元首相の娘）とレイディ・エリザベス・フォーブズ、侍従のサー・ウィリアム・ゲルとアントニー・バトラー・セント・レジャード、侍医のヘンリ・ホランド医師、近習のフィリップ・クレイヴェル、家令のジョン・ジェイコブ・シカード、召使い・小姓のジョン・ヘアロニマスとフィリップ・クラックラー夫妻（ドイツ人）、御者のチャールズ・ハ

一ト拉斯、それに全行程を同行した養子扱いのウイリアム・オースティン少年であった。<sup>(22)</sup>一行は八月一八日にブラウンシュヴァイクに到着、一八〇六年の父の戦死後から公爵を継いでいる弟に会い、月末まで同地に滞在し、冬をナポリで過ごす計画をもつてイタリアに向けて出発した。この時点では翌春にはブラウンシュヴァイクに戻り、故郷に生活の本拠を置くつもりだったが、ナポレオンの百日天下による戦争の再発と弟の戦死によって、翌年には叶わぬ夢となつた。

ブラウンシュヴァイク滞在中に一行から離れる者が出了。リンゼイがスイスで療養中の姉レイディ・グレンバーヴィのもとへ発ち、レジヤーが病氣でイギリスへ帰つた。レジャーの代わりにケッペル・クレイヴンが加わり、また侍従武官としてヘス大尉（義弟ヨーエク公の私生児、娘のシャーロット妃と交際したことがあつた）が加わつた。キャロラインはコーンウォール公爵夫人の服装で、八月二九日にブラウンシュヴァイクを出発、ピルモントまで弟の見送りを受けたのち一路南下し、ゲッティングン、フランクフルト、ハイデルベルクをへてシュトゥットガルトに到着した。同地でウェルテンブルク王フリードリッヒ一世の歓待を受けた。その後スイスに入り、チューリヒ、ルツェルンをへてベルンに着き、同地でやがて娘シャーロットの夫となるザクス・コーブルク家のレオポルド王子の姉でロシアのコンスタンティン公爵夫人の訪問を受けた。その後ローザンヌをへて九月二十五日にジュネーヴに到着した。<sup>(23)</sup>

ところでブラウンシュヴァイク滞在中にドイツ人の部屋付き女中レッシュンが病氣のため外れ、やむを得ずアネット・プレジンガーを雇い入れた。しかしキャロラインはプレジンガーの品行に不安を抱き、

ジェネーヴのキャムベル宛に行儀正しいレイディ付き女中をひとり見つけてほしい、と手紙を書いていた。<sup>(24)</sup>ジュネーヴにおいて、キャムベル経由で推薦されてきたのがルイーズ・デュモン（Louise Dumont イギリスでは Demont と綴られた）であり、キャロラインに気に入られ、一七年一一月まで筆頭の部屋付き女中を務めた。「デュモン嬢はとても良い娘さんです。まったく化粧をしないのですが。けれど万事うまくいっています」とミラノからキャムベル宛の手紙に書いた。

のちに詳述することになるが、デュモンはミラノ委員会で証言し、さらに貴族院の「裁判」の際にも証人となつて、キャロラインの「不義」を「証明」するものとも重要なキー・パーソンとなつた。自ら深く敬愛していたという女主人を裏切つたのである。彼女の実家はジュネーヴからレマン湖北岸を三〇マイルほど上つた小村コロムビアにあり、母は夫が死亡したのち彼女を連れて再婚したので、父違ひの妹がいた。この妹マリエッテ・ブロンものちに侍女として仕え、姉が外れたのち、代わつて部屋付き女中となり、その後も終始キャロラインに付き添つてイギリスに来ることになる。<sup>(25)</sup>小姓のクラックラー夫妻は妻の出産が近づいたため、離れてイギリスへ帰つた。<sup>(26)</sup>

一行は再びローザンヌに戻り、ここでデュモンが部屋付きの勤務につき、やがてアルプスを越え、一〇月八日にミラノに到着した。オーストリア政府は一行を歓待し、皇帝の侍従であるジツツィリエール伯爵は市内の名所を案内した。のちにキャロラインが語るところでは、

伯爵はキャロラインに対し、今後イタリアで暮らすにあたつて、大家族を取り仕切る術を心得ていて、雅な生活を経済的に運営していく要になる人物が必要だ、と熱心に勧めた。彼女もそれに同意し、伯爵が

推薦する人物を受け入れることにした。この人がバルトロメオ・ペルガミであり、ピノ伯爵の配下にいたミラノ近郊出身の軍人であったが、戦争終結とともに自由の身になっていた。ピノ伯爵配下のときと同じ待遇で、侍従として雇い入れたが、やがて信頼を得て実質的な

### 「侍従長」(superior kind of courier)

の役割を背負うようになつた。ペルガミに対する妃の信頼は後述するベリー宛の手紙が語つている。<sup>(28)</sup> 彼にはミラノ近郊に住む妻がいたが、姿を見せたという記録は見あたらない。

ミラノを一〇月一八日に発つた一行は、フィレンツェをへて、月末にローマに着いた。ローマではスペインの元国王夫妻の表敬を受け、また教皇にも拝謁した。さらに南進して一月八日にナポリに到着、連絡していたナボリ王ヨアヒム・ムラト夫妻（夫人はナボレオンの妹）から大歓迎を受け、ナボリは嫌いと言ひながら、予定通り翌年三月まで滞在する。ナボリでは物価は比較的安いが、広大な住居の借り上げ賃や南国の風に浮かれた仮面舞踏会などで出費がかさみ始め、資産管理を依頼しているロンドンの不動産業者モーゼス・ホーパーにロンドンに残してきた住居や家具の処分を依頼している。部屋付き女中の仕事はフレジンガーとデュモンが務め、他の従者に変化はなかつたが、プラウンシュヴァイクから連れてきた三人の歩兵のうち一人が飲んだくれのため送り返した。その補充の兵士の人選をペルガミに依頼し、元ピノ伯爵の配下にて、ペルガミ家の召使いをへてムラト王の厩舎で働いていたテオドーレ・マジョッキ(Theodore Majocchi)を月初めに馬番として採用した。<sup>(30)</sup> マジョッキは一行がペーチョに居を定めた直後の一八一七年八月末、他の召使いと喧嘩して持ち場を離

れたため、一〇月に解雇されたが、実質的にはペルガミの配下として二年九ヶ月間働いた。後述するように、マジョッキは金銭で買収されキャララインを裏切り、ミラノ委員会と貴族院で作為が見え透いた証言をし、不都合なところは「覚えていない」(Non mi Ricordo)を繰り返したキー・ペーソンの一人である。

ナボリ滞在時から、ペルガミがキャラライン家の行事や支出のかなりの部分を仕切つていたようである。<sup>(31)</sup> キャララインはペルガミを信頼し頼るようになり、二人は親密になった。この親密さは、後にイギリス当局側についた批判者や証人たちの攻撃的になつた。後に詳述するが、オムプテーダ男爵はすでに一五年一月二十四日には、キャララインの「密通」の話を作り出す作業を始めていた。後のミラノ委員会における証人たちは、この時期に、キャララインが成長しすぎたヴィアム・オースティンの寝室を彼女のものとから別室に移らせたことについて、それはペルガミとの自由な密通を可能にするためだった、などと証言した。この証言について同時代の伝記作者ヒューイッシュは根拠がないと主張する。<sup>(32)</sup> またキャララインはナボリでムラト王の歓迎に応えて仮面舞踏会を催したが、後に批判者たちは次のようない証言をした。キャララインは何度もマスクや衣装を変えて現われ、もっぱらペルガミをパートナーに選んで踊つた。またペルガミが早くに会場を出て帰つてしまつたので、彼女はペルガミの後を追つていきホールに戻るよう説得したが、ペルガミは戻ろうとしたしなかつた。彼女はわびしく落ち込んで会場に戻つた、などと。ここでもヒューイッシュは「想像力たましい頭脳が生み出した作り話」と断じている。

一五年二月には一行から離れていたシャーロット・リンゼイが兄ノ

ースとともにナポリで合流し、賑やかになった。しかしながらブルームからの手紙が、夫側が離婚を策謀し再婚の方策を練っていると伝えてきたため、予定通り北イタリアに戻り夏をコモ湖畔で過ごすが、あるいは一気にイギリスに帰るか、とキャロラインは悩み考えた。<sup>(34)</sup>

結局当初の予定通り、三月一日キャロライン一行はローマに向けてナポリを出発した。そのときナポレオンがエルバ島から脱出したとのニュースが届き、また暗雲が立ちこめ始めたが、三月十五日、ローマ郊外の港キヴィタ・ヴェッキアから英軍艦クロリンド号でジェノヴァに向かった。キャロラインはクロリンド号上からエルバ島を望見しながら、ロンドンの親友マアリ・ベリ宛に、ホイットブレッドとブルームの判断がどうかはわからないが、「この地上で私を受け入れてもらえる場がロンドン以外になくなつたときには、確実にイギリスに帰るでしょう。けれども、今はすべてのことがシバの女王のように非常にうまくいっています」と書いた。さらに追伸で「私はナポレオンの配下だった軍人を従者に加えています。この人は私にとつてまったくの宝であり、誠実で思慮深く、この人を召抱え続けるつもりです。シカードは彼が入ってきたことをとても喜んでいます。彼はミラノの出身で、……いま「イギリスに帰った」シカードに代わって彼の仕事を継いでいます」とペルガミとその役割について述べ、娘から楽しい手紙が三通届いている、早くに娘と再会できるよう天のおぼし召しを、と手紙を結んだ。これほどイタリア生活を享受していたのだが、「ナポリは心底から嫌いで、そこに二度と戻るつもりはない」とも書いている。<sup>(35)</sup>

## キャロライン妃の大陸旅行とミラノ委員会

女官や同行者たちは次々に彼女のものを去つていった。ナポリを発つとき、女官レイディ・フォーブスとゲルはしばらく同地にとどまつた後帰国するため、ヘスはイギリスへ、クレイヴンはパリへ行くため、一行から離れた。また途中のリヴォルノでリンゼイとその兄ノースがイギリスへと旅立ち、取引銀行家の妻ファルコネット夫人も子どもが住むイスイスへ向かつた。二五日にジェノヴァに到着し、海沿いの邸に宿所をおいたが、そこにリンゼイの姉レイディ・グレバーヴィ夫妻が現れ、しばらく同行することになった。またキャロラインの要請を受けて、前年ブラウンシュヴァイクで別れたキャムベルが、六人の娘とそのガヴァネスを伴つてジェノヴァに合流し、六月にミラノで別れるまで女官の任についた。<sup>(36)</sup> キャムベルはのち一八年三月に牧師ベリと再婚する。一方、キャロラインの要請を受けたイギリス海軍士官ジョージ・ハウナムが加わった。ハウナムは両親を失つた後キャロラインに育てられ、長じて海軍に入つていた彼女に忠実な青年であった。<sup>(37)</sup>

しかしキャムベルの後任のイギリス人女官が見つからなかつた。ジエノヴァからミラノへ馬車で移動したとき、キャロラインと並んで同乗したのはデュモンとオースティンのみで、ペルガミは騎乗して従つた。キャムベル一行は別行動で遅れてミラノに着いた。<sup>(38)</sup> 一〇日ほどヴェネツィアに旅行してミラノに戻り、キャムベルがミラノから去つた数日後に、ペルガミの妹でオーストリア人の零落貴族オルディに嫁いでいたアンジェリカ・オルディ（オルディ公爵夫人）が女官として加わつた。オルディ夫人は寡黙でイタリア語さえよく話せず、知性に欠けていたが、従順でキャロラインに最後まで付き添つてロンドンに来ている。<sup>(39)</sup> 一行がヴェネツィアに旅行した際、宿泊したホテルでキャロ

ラインが自分の首飾りをはずしペルガミの首にかける、彼はそれをすぐにはずしてキャロラインの首にかける、といった遊びをしたことが、ホテル従業員によつて観察されている。<sup>(40)</sup> キャロラインの小宮廷においてペルガミの影響力が大きくなつていた。

キャロラインはミラノ北方の景勝地コモ湖のほとりに住居をおくことにした。最初に住居をおいたコモ近郊のヴィラ・ヴィラーニでは、かつてイングランドのブラックヒース在住時に経験したのと同じように、多くの名士や近隣の住民が来訪した。彼女が六月一八日のワーテルローの戦いについて耳にしたのもこの時期であり、その二日前のカートル・プラの戦いで弟ブラウンシュヴァイク公が戦死したことを、客人として頻繁に訪れていたハノーヴァーのオムプテーダ男爵から聞き、衝撃を受けた。<sup>(41)</sup> 故郷で暮らすという当初の夢は遠のき、年若くして継承した甥の攝政を務める気持ちも一時あつたが、諦めた。やがてコモ湖西岸にあるピノ伯爵夫人所有の邸宅ヴィラ・ガローヴォを一五万フランで購入した。この邸宅は風光明媚の地にあり、皇太子妃の邸宅に相応しくするため、画家モンチエリに依頼して絵画を飾り内装を改め、周囲の整備にも資金を投じ、ヴィラ・デステ (Villa d'Este) と命名した。この新居で近隣の住民を招いたパーティーを催し、地元の詩人ベリーが頌詩を贈るなど幸先は良かつた。<sup>(42)</sup> ここに居をおいた四ヶ月の間に、ペルガミ家の一族の多くの者がキャロライン家に仕えるようになつた。母リヴィアがしばしば家事に携わり、弟のルイジが兄を手伝う従者、妹のマルティニ夫人がリネン係になり、さらに従兄弟二人も炊事場の事務、警備員として、その息子の一人も乗馬従者となつていた。<sup>(43)</sup>

またこの時期一八一六年一月から、ナポレオン軍麾下の将校だったジセッペ・サッキも従者に加わり、その後盗みで解雇されるまで、ほぼ一年間務めた。サッキも後述するように、妃を裏切つて証言したキーパーソンの一人である。<sup>(44)</sup>

## 2 地中海からエーゲ海へ—チュニス、アテネ、イエルサレム

ヴィラ・デステには一月初めまで住み、キャロライン一行は冬を迎えて同一二日、地中海艦隊を利用して再び地中海への旅に乗り出した。一四日にリヴィアイアサン号 (ブリッグス艦長) でジェノヴァを出港し、一路南下してシリリーに向かいペレルモに一〇日間、メッシーナに五週間滞在した。翌年一月六日、クロリンド号 (ペチエル艦長) でメッシーナを出てシラクーサに停泊した。当初ペチエル艦長はキャロライン一行を運ぶのを拒んだ。それは、軍艦は乗客を運べないことによる費用の問題、及び身分の低いペルガミと一緒に食卓につくのはこまる (ブリッグズ艦長から引き継いだもの)、という二つの理由によるものだつた。彼女はその意見を受け入れ、艦長とは生活を区別することにした。結局ペチエルは船室をキャロラインに開放してくれ、それをオルディ夫人用、デュモンと妹のマリエッテ・ブロン用の部屋に分け、彼女も独自の食卓をおき、専用の料理人をおいた。ペルガミの娘チロ・ヴィットリン (一八一四年生まれ) がミラノから同行しており、キャロラインが可愛がりしばしば膝の上においた。<sup>(45)</sup>

忠実な元海軍士官ハウナムは、しかしペルガミをよく思つていなかつた。彼はある日、キャロラインの小宮廷を第二級のイタリア人でうめてしまつた、とペルガミに食いついた。ハウナムは家政を掌握した

ペルガミを嫌い、対立は次第に激しくなった。<sup>(47)</sup>しかし今やこのキャロラインの小宫廷はペルガミがいてこそ、何とか円滑に運営できる状況になっていた。キャロラインは、艦長たちに蔑視されたことをきっかけに、頼りにするペルガミに貴族の肩書きを与えると強く思うようになった。シラクーサを出てカターニアに停泊していたとき、同地から一〇マイルほど南方に男爵領に属する所領が売りに出ていることを聞き、ペルガミのために即座に購入した。彼はその領主として、まずキャロラインからバロン（バロン・ペルガミ・デラ・フランチナ）<sup>(48)</sup>と呼ばれ、家令の地位についた。またカターニアでキャロラインは画家を雇い、トルコ風の衣服を着た彼女とペルガミ、さらにヴィットリオの肖像を描かせた。<sup>(49)</sup>

キャロラインの冒險の長旅はこれから始まる。一行は当時シリリ地区の小艦隊の指揮官だった海軍将校フリンント艦長が指揮する三本マストの商船（ボラッカ）で、地中海対岸のチュニスに渡った。このボラッカをジョージ三世用のヨットから名称を借用してロイヤル・シャーロット号と呼んだ。チュニスではイギリス領事オグラランダーの世話をになり、また現地のムスレムのパシャ、マムース・バショウの歓待を受け、パシャの宮殿に逗留した。チュニスに一ヶ月滞在したが、その間キャロラインは、ナポリとサルデーニア出身の奴隸たちの解放に貢献した。これは最初、フランス領事が本国の指令で奴隸の解放を交渉していたが、海軍力を持つイギリスがナポリとサルデーニアの王の意向を受けて仲介に入り、エクスマス提督がパシャに対し、英領セント・アンティオコ島を侵犯したチュニス人の処罰を要求しただけでなく、「奴隸はすべて例外なく解放」するよう要求した。キャロライ

はすでに奴隸の解放を喜ばしいと歓迎する意向をパシャに語っていたが、政治問題にはいつさいかわらないと明言していた。提督の要求に対し、パシャは脅しには屈しないと激怒したが、しばし考えて皇太子妃のご意向には逆らわない、サルデーニアの奴隸たちは妃に預けられた。この事件が彼女の一行をチュニスから早々に退去させることになったが、その後提督も介入から手を引き、奴隸は解放されたのである。<sup>(50)</sup>

四月初め、キャロライン一行は借り上げた三〇〇トン余りのロイヤル・シャーロット号でギリシアへ向かう。船長は持ち主のヴィンチエング・ガルジーロが務めたが、それまで戦艦を指揮していたフリン大尉（John Flynn）がそれを指揮し、ハウナムも協力した。三月二二日にチュニス港を出帆するとき、停泊するイギリス艦隊から二一発の祝砲が打ち上げられた。二九日にはマルタ島に検疫のため寄港し、三一日にいよいよ地中海を一路東に乗り出し、三日目に岸壁がそそり立つキティーラ島に到着したが、上陸せずにミロス島へ進んだ。ミロス島を四月五日に出帆し、八日にアテネに到着した。アテネ市街は港から約四マイル離れていたので、イギリス領事が手配した数頭の馬で市街に行き、設備がもつとも整っていたフランス領事館に逗留することになった。キャロラインは早速翌日から好寄心を發揮して史跡を訪ね、さまざまなお城を観光した。

ささまざまなお城を観光した。アテネの長官も従者を連れて何度も表敬訪問に来た。二十四日にアテネを発ちコリントへ、さらにデルフィ、スバルタなど歴史的都市を訪れた。<sup>(51)</sup>

その後ギリシアを出てエーゲ海を北東に進み、トロイに上陸して遺跡を訪ねた後、六月五日にはダーダネルス海峡を通つてマルモラ海に入り、七日にイスタンブールの港に着いた。イスタンブールの市街に入るとき、妃は雄牛が引く牛車に乗りデュモンと妹ブランだけを横に座らせ、他の一同は徒步で進んだ。最初に逗留したのはイギリス大使館であった。キャロラインはトルコのエキゾティックな文物に触れて興奮し、他の一同は徒歩で進んだ。最初に逗留したのはイギリス大使館であった。キャロラインはトルコのエキゾティックな文物に触れて興奮し、金襷の刺繡がある衣服など狂ったように買い込み、別便でイタリアに送った。しかし到着後まもなく疫病が蔓延したため、市街から一五マイルほど離れたヨーロッパ外交官の別荘地ビウテールで大部分を過ごした。<sup>(52)</sup> しかしひトルコの太守はヨーロッパ人の王族を煙たがる傾向があつたので、長居はせず一六日には同地を発ち、トルコ西岸を南下してエルサレムへ向かった。聖地巡礼の目的を立て、船中で一行の名称を「聖キャロライン騎士団」(the Order of St. Caroline)と決め、ペルガミをその団長(Grand Master)と称した。パレスティナ沿岸に着き七月一日サン・ジャンヌ・ダクル(アッカ)に上陸、さらに南下してジャッファに上陸したが、地域を治める太守に巡礼の許可を求めるためアッカに戻った。太守は最初のうちは申し出を断つたが、熱意に動かされて許可し、五枚のテントと必要なだけの馬、護衛の将兵、案内人、荷物運搬用のラクダを貸与してくれた。七月八日夕刻六時、二〇〇人ほどに膨れあがつたキャロライン一行はエルサレムに向けて出発した。<sup>(53)</sup>

夏になり日中は暑いので夕刻と朝の時間に歩き、ナザレをへて一二日午後九時にエルサレムに着いた。エルサレムではカプチン派修道院内に逗留した。聖地では聖墓参拝をはじめダヴィデ王の家、ソロ

モンの教会遺跡など、多くの聖なる場所を訪れ、往事を偲んだ。その後警護の兵士を増やし、聖者の跡を追つてヨルダン川西岸からジェリコまで行き、またエルサレムに戻った。一七日にエルサレムを発つて帰路に入り、翌日ジャッファに到着し、すでに待機していたロイヤル・シャーロット号に乗り、地中海を西に向かつた。キプロス、ロードス、クレタの島々に停泊しながら、シシリーのシラクーサにたどり着いたのは八月一九日であった。帰路の地中海の船旅は真夏になり晴天が続いたので、一行は、船のデッキにテントを張つて日中はデッキで過ごすことが多かつた。この状況を、ミラノ委員会及び貴族院における「裁判」で、船主ジエタノ・パトゥルゾと船長ヴィンチエンゴ・ガルジーロが、衣服もろくに着けずに彼女とペルガミが手を取り合つていたとか、砲門の上にペルガミが座りその膝の上に彼女が座つていた、などとキャロラインの「不義」を証言した。<sup>(54)</sup> キャロラインによると後のメモでは、「私は衣服を脱ぐことなどまったくせずに、そこには〔テントの中に〕休んでいた。私と一緒にデッキにいた人たちも同じようにしていた」と述べている。<sup>(55)</sup> 追憶録の著者ヒューイッシュは二人の密通の物語は、「実際に起つたこと」というより、想像力に富んだ頭脳が生み出したものであった」と述べている。<sup>(56)</sup>

シラクーサはパレスティナを出てから最初のキリスト教地区であったが、上陸に当たつて厳重な検疫が課せられ、一行全員が検疫を終えるのに四〇日を費やした。その間キャロラインには隔離された小住宅があつてがわれた。八月二七日に水先案内人を得てシラクーサを出航しようとしたとき、アルジェリア人の攻撃を受ける怖れがあるという情報があり、オーストリア海軍のフリーゲート艦の申し出を受け入れ、

同艦に乗り換えて出港した。三一日にメッシーナに到着、再び検疫を受けて九月七日にマッシーナを発ち、一五日無事にローマに到着した。ローマではイタリア政府関係者や同地在住のイギリス人名士たちの歓迎を受け、またローマ教皇にも拝謁した。一七日にローマを発ち、陸路でフィレンツェ、ペルマ、ミラノをへて二一日にヴィラ・デステに帰り着いた。<sup>57)</sup>

ほぼ一〇か月ぶりのヴィラ・デステだったが、留守中に様子がかなり変わっていた。大きな変化は邸内に劇場ができていたことだった。その劇場で祭りが催され、キャロラインとペルガミが愛人同士となつて一幕の劇を演じたので、また彼女の乱行として喧伝されることになる。しかしヴィラ・デステに戻つて判明した最も深刻な事態は、これまで再々顔を出していたオムブテーダ男爵が、キャロラインの行動と生活を探る密偵・スペイだつたことであった。キャロラインはようやく帰ってきたものの、ヴィラ・デステに長く住む気持ちは消えていった。彼女はこの時期ミラノ近郊の一所領バローナを二二万フランで購入し、後にこれまでの忠勤に報いるためペルガミに贈与した。この所領はヴィラ・バローナと名づけられ、彼女と一緒にしばらく滞在した。<sup>58)</sup>

同年一一月には再びヴィラ・デステから旅に出た。一行はしばらくルガーノに移り、翌一七年二月にはバローナを発ちバイロイト在住の妃の叔父を訪ね、ミュンヘン、カールスルーエ、リンツをへてヴィーンに入つた。キャロラインはオーストリア政府に対し、オムブテーダによる密偵行動によって受けた侮辱と引き起こされた不安を述べ、政府側の満足できる返答を求めた。ヴィーン駐在イギリス大使ステュア

ート卿は姿をくらまし、何の挨拶もなかつた。キャロラインは大使の所在がわからないと知らせてきた手紙を、そのままロンドンのキャニング宛に送つた。二年前に初めて訪ねたときの歓迎とは打つて変わり、オーストリア政府の扱いは冷淡で、ロンドンの摂政政府と緊密な連絡があることが明白に感じられ、彼女は早々にヴィーンを離れた。<sup>59)</sup>このときキャロラインはまだ気づいていなかつたのだが、スチュアートは兄である外相カースルリー卿（ロバート・ステュアート）の内密の指示を受け、オムブテーダ男爵とはかつて、キャロライン妃の「不義」あるいは「皇太子妃にあるまじき行為」の実態をつかむ作業を進めていたのである。カースルリー外相を軸としたこのスペイ活動は記録で見るがぎり、一八一六年一月には始まつていた。<sup>60)</sup>

妃はその後トリエステでは大歓迎を受け、四月末にヴィラ・デステに戻つたが、ヴィラ・デステもオーストリア当局の監視がさらに強化され、残していた召使い、従者たちの様子がよそよそしくなつていた。キャロラインはヴィラ・デステを棄てる決心を固め、イギリス、オーストリアの当局の監視から自由な、新たな安住の地を求めることにした。<sup>61)</sup>次の安住の地として選んだのはローマ教皇領に属するペーザロである。ヴィラ・デステは売りに出し、八月にアドリア海に臨むペーザロに到着し、やがて郊外の相応しい場所に居を定めた。最初はペーザロ郊外一マイルほどのヴィラ・カプリリに仮住まいしていたが、すぐ近くの所領を二五〇〇フランで購入し、五〇〇ポンド以上かけて補修を加え、ペルガミの娘に因んでヴィラ・ヴィットリアと名付けてこれを本拠にした。キャロラインは、その後一九年八月から半年間フランス南部で過ごしたが、それ以外は二〇年三月にイギリスへの帰国

を決めるときまで、このペーロ郊外に生活の本拠をおいて、干渉から解き放たれ、南国の明るい空と海のもとで元気を取り戻した。<sup>(62)</sup> ヴィラ・デステは一九年五月によくやく売れて負債の一部は返済できた。<sup>(63)</sup>

## 一一 追跡する密偵——オムプテーダ男爵

### 1 外相カースルリーの指示

一八一六年九月にヴィラ・デステに帰ってきたキャロラインは、地元の警察から邸がスパイに取りつかれている、という連絡が入り衝撃を受けた。彼女の留守中に、彼女の寝室や居間のかぎが開けられ、くまなく調べられていたのである。それを指示し操っていたのがフリー・ドリヒ・オムプテーダ男爵であり、この時点で彼を密偵として雇っていたのが、ハノーヴァー政府のムンスター伯爵（キャロラインの昔の家庭教師の息子）とウイーンでキャロラインの前から姿を消した駐オーストリア大使ステュアート卿であった。ハノーヴァーの男爵でローマ教皇庁への使節を務めているオムプテーダは、一四年末にキャロライン一行のナポリ滞在からしばしば姿を見せており、またジエノヴァに戻ったときも現れ、彼女も歓迎してしばしば食事をともにした。彼女はオムプテーダが妃への挨拶と護衛のために出仕していると思い込んでいたが、彼の真の目的は、ロンドンの摂政の指示を受けて、キャロラインの生活と行動を内偵しロンドンに報告するためであった。<sup>(64)</sup> ワード・パリーは、ペルガミについて評した一五年一月二四日付けオムプテーダ男爵の次の報告に注目する。「身長六フィートをこえるアボロのよくなすばらしい堂々とした容姿の持ち主であり、彼の見かけの美しさには皆ひきつけられている」。すばらしい容姿

で頼りになりそうなペルガミを見て、キャロライン妃の愛人Ⅱペルガミという虚構の筋書きを作つて噂を広げたのが事の始まりであり、レスティリ、マジョッキ、サッキ、クレーデなど妃の従者たちをそそのかして密通の物語を仕立て上げようとした、とパリーはとらえている。<sup>(65)</sup>

筆者が調査した記録を追うと、彼はすでに一五年三月一日付で、ナポリからフランス語の手紙を送り、キャロラインとペルガミの親密さについて報告し、また同年一二月、ミラノからヴィラ・デステにおける妃の生活について送った手紙が残っている。彼によってキャロラインとペルガミの親密さがいち早くロンドンに伝えられたのである。<sup>(66)</sup>

オムプテーダに託された使命は、外相カースルリーが駐オーストリア大使の弟ステュアートに送った一六年一月二一日付けの内密の指示文が語っている。われわれがオムプテーダらの協力によって進めている目的は次の二つだとカースルリーは明確に説く。一つはスキヤンダルで体面を傷つけた妻から摂政殿下を救い出すため、何人も疑えないような確定的な証拠を集めること、それにより離婚が可能となるものでなければならない。いま一つは離婚まで行けなくても、キャロライン妃のイギリスへの帰国を摂政殿下が正当に拒否できるような一群の証拠を集めることである。摂政側の立場がここにきわめて鮮明に説かれしており、離婚できない場合でも帰国させない、という断固とした方針を固めていた。外相の指示に対するステュアートの返信は、オムプテーダを通じてキャロライン妃の私生活について証拠集めに努めている、「このまことに汚くまことに不名誉な仕事」への協力者を得るのは容易でないこと、オムプテーダがいまムラトの知り合いといふれ込みで妃に出仕できると主張している男を買収し、偽の鍵を使って室

内を調べさせる計画などを提案していること、を紹介し、さらに妃のもとにはハウナム大尉を除いて身分の低いイタリア人しかいないので、イギリス人の協力者を得るのは難しい、仲間に引き入れる次の最もよい標的は妃に仕える二人のスイス人女中である、とステュアート

自身の意見を記している。<sup>(68)</sup> この最初の男は後にマジョッキを買収したこと、が判明するジセッペ・レスティ（一六年八月から雇用、厩舎長）とみられ、後述するクレーデ（馬匹係）も買収されており、男爵による買収計画のあらましが推察される。またスイス人女中とはデュモンと妹ブロンであり、デュモンはステュアートとオムプレーダが狙いをつけていたキーパーソンであったことがわかる。

## 2 オムプレーダの暗躍

キャロライン一行がギリシアからイエルサレムへ旅行している間に、オムプレーダはヴィラ・デステ内外に現れ、キャロラインの私生活とペルガミとの関係を聞きただそうとした。そのため、留守居をしている従者、侍女に働きかけ、女主人を裏切って情報を出すよう強要した。イタリア人の使用人たちは皆それに応じなかつたため、オムプレーダはドイツ人に狙いをつけ、一八一四年一二月のナポリ以来務めている調馬師・御者モーリス・クレーデとさきに述べた問題が多い部屋付き女中アネット・ブレジンガーを買収したのである。一行が旅から帰っていた一六年一〇月の祭りのこと、ヴィラ・デステの炊事場に一人の男が侵入する事件があり、ペルガミが勇気を奮つて捕まえコモの警察に突きだした。その男がクレーデであり、キャロラインの住居の鍵を模造する目的で不審な行動をしていたのだった。コモ總督

の前で彼はオムプレーダに金銭で買収されていたことを告白した。プレジンガーはクレーデの手引きをした。二人は一六年一月初めに解雇された。プレジンガーは身持ちが悪くクレーデの子を身ごもつておらず、実家へ送り返された。<sup>(70)</sup>

失職したクレーデは、解雇された翌日、自らの非を詫びてまた復帰できるよう仲介してほしいと懇願する手紙を、妃の配下のトマシア騎士宛に送ったことが知られている。その中で、自分とアネットは皇太子妃への出仕の仕事から昨日解雇された。オムプレーダ男爵にたぶらかされて、自分の最良の女主人であつとも寛容な妃を裏切つてしまい、恥をさらした報いであることを告白する。それは一年ほど前のことで、皇太子妃がイエルサレムの方へ出発する一ヶ月ほど前に、アムブローズ・チャザーティなる人物を介して、オムプレーダ男爵から皇太子妃の寝室を調べるため、彼女の居室の鍵を手に入れてほしい、と強く要求された。最初はそのような悪巧みには加担できないと断つていたが、たびたび金を渡され、言うことを聞かねば破滅させるなどと脅され、弱い人間なので男爵の要求に応じた。そのとき邸内の状況と妃と関係がある人物について詳しく尋ねられた。いま正真正銘深く悔いでいるので、何とか取りなしてほしい、と述べている。<sup>(71)</sup>

解雇された二人は翌年ハノーヴァに招かれ、六月二一日、キャロラインとペルガミの関係について証言した。プレジンガー（二十六歳）はナポリやヴィラ・デステで、妃の寝室の大型ベッドに他にも誰か寝た形跡があつたなどと述べた。プレジンガーは出仕している間に二回妊娠しており、妃がデュモンを採用したのもプレジンガーに問題があつたからであった。クレーデ（二十四歳）はペルガミについて次のように

窓 証言した。ペルガミは侍従として入り男爵になった。キャロライン妃はペルガミと一緒に歩いただけでなく、同じテーブルで食事をとり、同じ馬車に乗って外出した。二人が親密になってから、召使いたちが次々にやめていった。妃とペルガミの部屋が近接していたことは誰もが知っていた。彼は小宮殿の主のようであった。コモ湖に二人きりで小さなボートに乗っていたこともあった。またペルガミ一家のものが次々に邸で働くようになった。<sup>(22)</sup> 若輩のクレーデは確かにペルガミを始んでおり、ハノーヴァの保護のもとで質問者が望む回答を与えたと言えよう。この二人は後にミラノ委員会にも召喚されて証言した。

オムブテーダの策動ぶりは、一七年三月七日ミラノ発の『クーリエ』紙の記事を載せた『タイムズ』によると、次のように伝えている。皇太子妃はコモを去って当地に住んでいるが、多くの話題を提供している。ハノーヴァのローマ大使オムブテーダ男爵が、当地に長居する明白な動機もないのにとどまって、皇太子妃を困らせている。

「妃は、オムブテーダが当地に長居しているのは、権威あるドイツの宮廷でイギリス公使から妃の行動を監視するよう指示されているからだ、と思うようになつた」。彼女はオーストリア政府にこの問題について問い合わせの手紙を送ったが、オムブテーダは動くようには見えない。妃もイギリス政府で親しいキャニングに手紙を出し、「明らかに監視されていることに不満を述べ」、こちらに不安を与えないようにしてほしい、そうでなければイギリスに帰るという意向もちらつかせていた。<sup>(23)</sup> 記事ではさらに、妃はヴィラ・デステの購入に五千ポンドかけ、改修・整備にその同額近くをかけたが、不愉快な目にあつたのでコモに再び住むつもりはないとの意向である、と伝えている。<sup>(24)</sup>

『タイムズ』はミラノの朝刊紙から引用した続報を伝えた。妃の留

守中に不正に鍵をせしめ、妃の汚点を求めて室内を調べまわすなどの悪質なことを行つたにもかかわらず、帰省した妃の前にそしらぬ顔で表敬したオムブテーダに対し、妃に忠実な海軍士官（ハウナム）がミラノとコモの中間に位置するバルタシーマで対決することを申し入れた。オムブテーダは決闘の場所をスイスに移すよう提案し逃げの策に出た。男爵の悪質な事件が発覚した直後に、妃が主催した大きな会にミラノ知事や主だった名士が出席したとき、妃はこのことをすべて知事に話した。知事はまさに「恥すべき行為」と憤り、決闘申し入れのことも聞き、彼は紳士として遇するに値しない、と語った。やがてオーストリア政府の侍従カンテナウ伯爵がコモに来て、この事件とハノーヴァとの関係はよく知らない、男爵は悪質なことは行つていないと自ら証明すべきだ、と述べた。しかし男爵は何らの弁明も行わず、ハウナムとの対決を避け、一ヶ月以上も後に延期してフランス国境に近いドイツ領を指定するなど逃げの手を打つたため、カンテナウ伯爵はそのような人物は信頼できないと宣言した。伯爵がミラノに戻つた後、キャロライン妃は、ハノーヴァの男爵をオーストリア領内から追放する命令を出したとの連絡を受けた。<sup>(25)</sup> 決闘申し入れに関するハウナムとオムブテーダ間の一連の往復書簡は、のちに貴族院の「裁判」中止に、『タイムズ』が全文を掲載した。<sup>(26)</sup> こうした経緯からみて、オーストリア政府はこの時点では、イギリス攝政政府からキャロラインの身辺調査、あるいは彼女と距離を置くことなど、とくに強い要望や指示は受けていなかつたと判断される。

一八一七年にはさきの二人以外にも、オムブテーダの指示によりハ

ノーヴァで証言した者がいる。その証人はキャロライン一行が一七年三月にカールスルーエを訪れたときの宿の女中バーバラ・ケイスラー（あるいはクレス）、二三歳である。彼女は八月七日に金銭を渡されハバトヴァから招集を受けて証言し、妃の部屋は一〇号、ペルガミの部屋は「二号だったが、一二号に妃が寝るからと広幅ベッドに変えさせられた。夕刻に一二号室に水をもって入つたら、ペルガミがベッドに横たわり、妃は衣服を着けてベッドに座つていた。妃は急いで起きあがつた様子だった、などと述べたといふ。<sup>(77)</sup> 摂政側はこの証言を重視し、ケイスラーは貴族院の「裁判」の際にも証人として招かれた。<sup>(78)</sup>

またキャロライン一行が地中海からパレスティナへ旅に出た後、男爵はミラノにおいても証拠集めをした。一六年一月にはヴィラ・デステの内装にかかわった画家カルロ・ボッシに宣誓させ、証言させた。彼は庭で妃とペルガミが抱き合つてキスをしていた、などと述べた。さらに三月にはコモの劇場経営者コロムビと眼鏡・服飾商タッチヨにも宣誓させ、妃とペルガミの部屋の間のドアは鍵がかかっていないかった、という証言を引き出した。<sup>(79)</sup>

このように一八一八年秋のミラノ委員会による組織的な証人調査が始まると前に、密偵オムブテーダの暗躍によつてキャロラインとペルガミの密通に関する証拠集めはすでに進行し、密通は既成事実のようになつていていた。また一八一四年から一六年までのキャロラインの旅行について紹介し、思い出やエピソードを加えた小冊が、一七年にミラノ近郊ルガーロで出版されていた。この小冊はまず英語で刊行され、その後イタリア語、フランス語版が続いて出たとみられているが、刊行後ほどなく妊娠中のシャーロット妃のもとに届き、彼女は母親の行

動に思い悩むことになつた。<sup>(80)</sup> ミラノ委員会がキャロラインとペルガミの関係について内密の本格的な調査を始める前に、二人の密通という既成事実がすでに作り上げられており、それに対応して後述するようにな、キャロラインは帰国の決断さえしていたのである。

### 三 ミラノ委員会——その証人たちとキャロライン妃

#### 1 シャーロット妃の急逝と委員会の発足

オムブテーダが暗躍していた一八一七年には、キャロラインの望みを打ち碎く新たな衝撃的な出来事が起つた。それは摂政とキャロラインの一人娘シャーロットの急逝であった。シャーロットは、両親の深刻な仲違いという不幸を背負つて育ち、母の在英中にも母と自由に面会しにくい環境におかれていたが、持ち前の明るさをもつて王位継承者として成長し、一六年四月、ザックス・コーブルク・ザールフェルド公の三男で気だての優しいレオポルドと結婚した。サリー州のクランボーンロッジが二人の新居となり、その幸せそうな生活から、王室、政府はもちろん国民の多くが新たな後継者の誕生を期待するようになった。翌年には妊娠し、一月には王子誕生の予定であったが、胎内の子どもが成長し過ぎ、一月五日夜、四〇時間にわたる苦しい陣痛の末（人工的な分娩処置も取られず）男児を死産し、その後の翌早晩に本人も他界した。シャーロットの予期せぬ急逝は、期待されていた王子の死産も加わつて王族、政府関係者のみならず、広く国民に大きな衝撃を与えた。キャロラインの支援者であつたロンドン市長ウッドは、シャーロットの訃報に接するとセント・ポール教会の鐘を打ち鳴らさせ、市上級議員の臨時会議を招集して迫つて祝賀

行事の準備中止を決めた。市内の多くの劇場や商店は扉を閉ざした。

一月七日付け『タイムズ』は「悲嘆にくれた心情とその表現が、これほど強烈にあらゆる人々に広がった経験は今までまつたくなかつた。……これほど衝撃的に広がつたことは記憶にない」と書いた。<sup>(83)</sup>

シャーロット妃の急逝のニュースがペーザロのキャロラインのものに届くには三週間ほどを要した。摂政はキャロラインとの関係はいっさい断つており、レオポルドは気が動転していた。首相リヴァーブールに促されて、レオポルドはようやく従者に姑宛の短い連絡文を数行書きさせた。この手紙がローマ、ナポリに向かう国王の配達人に託され、ペーザロに届けられる。ハウナムがキャロライン宛の手紙を受け取ったのは、一月三〇日の早晩のことである。配達人はシャーロット妃の急逝を伝えるものだと告げた。ハウナムはキャロラインが起床する時間まで待って寝室のドアをノックした。妃が顔を出したので「お伝えすることがあります。今朝、国王の配達人が来ました」と告げると、妃は「ああシャーロットが出産したのでしょうか」と応じたので、ハウナムはしばしば黙り込んだ。すると妃は「彼女が病気なの」「危険な状態なの」とたたみかける。結局、最悪の場合の覚悟もできているという妃の言葉をきいて、ハウナムは手紙を渡した。妃はそれを開封して読んだ後、ハウナムに返し、「ああ可愛そうなシャーロット」と大泣きに泣いた。しばらくしてやや冷静になり、「これで私の最後の希望がなくなってしまった。だがイギリスもまた大きなものを失った」と語った。<sup>(82)</sup>

同日、ハウナムはイギリスのゲル宛に、皇太子妃は衝撃を受けて手紙を書く元気がない。彼女はイギリスへは帰らないと決心した、と書

き送っている。<sup>(83)</sup> キャロラインの落ち込みようは深刻で、彼女の診療に当たつていた二人の医師フシナニとガッティによる、その衝撃で彼女は「激しい頭痛と胃痛」に襲われ、診察に行くと妃一人だけがまた四歳のヴィットリンと一緒にベッドに横たわっていた、という。またかつて妃の女官を務め、親交が続いていたリンゼイ宛にも、毎日のように悲しみの便りが届いた。<sup>(84)</sup>

キャロラインはシャーロットの訃報を聞いた後、イギリスの友人に宛てて次のように書いた。「いま私はイギリスへ行きたい気持ちでいっぱいです。愛しいシャーロットの墓の上で思い切り泣きたい。そしてもう一度誠実な友人たちと交わって楽しみ合いたいと思います。この二年間、オムブテーダと彼の密使たちによつて、またいまは最近ミラノに着いた新たなスペイによつて、たえず困惑させられて来ました。この敵たちの目的は私の幸せをすべて破壊し、私の死を早めさせることにあるようですが、私はイギリスに戻り、私を非難している人たち全員と対決することに決めました」。<sup>(85)</sup>

シャーロットの死去は、摂政側にとつても一つの転機になると思われ、妥当な理由を見出せれば、キャロラインとの離縁は困難ではなくなつたと思われた。しかし、この一八一七年は戦争終結後の深刻な不況のまつただ中にあり、イギリス国内の社会情勢は憂慮すべき状況にあつた。すでに一六年秋からロンドンと工業地域において、苦境にあふぐ労働者層が「武装蜂起」を企てているという噂が流布し、当局は警戒していた。一七年三月にはストックポートとマンチェスターの失业中の織布工たちが、急進派労働者バグリとドラマンドの呼びかけに応えてマンチェスターに六〇〇～七〇〇人も集結し、毛布をはおり、

摂政殿下への請願書を携えロンドンに向けて「飢餓行進」した。行路の途中で弾圧を受け多数の逮捕者を出して集団は解散したが、請願書はロンドンにたどり着いた仲間の一人クッドウェルによって三月一八日、シドマス内相に渡された。さらに六月にはノッティングガムシアのペントリッヂで二〇〇〇～三〇〇人が、失業中の元メリヤス編工ブランドレスらの指導のもと蜂起した。この地方的蜂起は広く工業地域の同様な企てと連携しており、またロンドンの大規模な蜂起計画との連結が伝えられ、当局の警戒心をあおり立てた。こうした民衆騒擾の動きは当局に雇われたスペイ、オリヴァーによって実態以上に大げさに当局側に通報されていた。しかも死刑を宣告されたブランドレスら三人のペントリッヂ革命の指導者たちは、シャーロット妃の死去の翌日一月七日に処刑されたのであった。<sup>(86)</sup>

やや平静に明けた一八一八年の三月、摂政は副大法官ジョン・リーチとはかり、法律の専門家を内密にイタリアに派遣してキャロラインの不義密通の証拠を集めさせる方針を決めた。オムプテーダによる虚構に満ちた断片的な報告がついに事態を大きく動かすことになったのである。摂政は一八年七月、大法官とリヴァプール首相に対し、極秘のうちにミラノでキャロラインとペルガミの密通の確たる証拠を集めよう指示した。八月初め、リーチはミラノに派遣する委員として、摂政の顧問を務める弁護士ウィリアム・クック、同じクリンカンズ・インの弁護士ジョン・アラン・ペウエルと、ウイーンのイギリス大使館付き武官トマス・ヘンリ・ブラウン大佐の三人を選び、八月八日付けの手紙で正式に依頼した。クックは破産法の専門家で著書もある老法律家であり、引退の身であつたが、代表格として引き受けた。パウ

エルは若い気鋭の弁護士であり、オムプテーダからリーチに送られた報告を見て、証拠はぎわめて不十分であり二人の密通は証明されていないと思った。ウイーン駐在のブラウンはイタリア、フランス語に堪能で証人尋問には不可欠な人物だった。さらにミラノ知事の元秘書サルダナ男爵の助言でイタリア人弁護士フランチエスコ・ヴィメルカーチとその事務所の協力も得ることにした。<sup>(87)</sup> 別行動で密かにミラノに向かった三人は、九月一五日にクックとペウエル、翌日にブラウンが到着して顔を合わせた。同二四日にヴィメルカーチも加えてブラウンの住居で初会合を行い、委員会の目的について合意した。<sup>(88)</sup> キャロラインの顧問弁護士ブルームは、摂政と彼の顧問たちの動きをすでに四月に感知していた。<sup>(89)</sup>

## 2 キャロライン妃に背いた証人たち

王室文書館に保管されているミラノ委員会関係の膨大な文書をひもとくと、一〇月二六日から翌年五月一二日までの間に八五人、後日一名追加して計八六人の証人を召喚し、キャロラインとペルガミの関係について証言させたことがわかる。証言記録はイタリア語が原本で、まずフランス語に次いで英語に訳されている。委員会では証言の信憑性を高めるため、まず証人の出身、年齢、宗教、現住所、家族の状況を尋ね、法律に従い誠実に答えるかどうか、誓約させた。また各人の証言をまとめた証拠文書の末尾に各人に署名させた。証人のほとんどはミラノないしその近郊の住民であり、キャロラインに雇われていた若干名のほかは、出入り職人など、近在の住人が圧倒的多数であった。妃の旅先のヴェネツィア、カールスルーエのホテルの従業員なども少

## ミラノ委員会における証人

氏名	年齢・性別	住所、職業	証言日	貴族院での証言
ピエトロ・サルデリ	18 女	ホテル給仕	10月26日(1818年)	
ダニエル・オルシンゴ	40 男	ヴァルラッジナ村、宿屋経営	10月26日	
ジェロラモ・アントニオ・グッジャリ	26 男	コモ、車夫	10月26日	
パティステ・マジョッキ	51 男	ミラノ、下のテオドーレの父	10月27日	
カイタン・ネグリ	40 女	ミラノ、主婦	10月27日	
カイタン・サッキ	42 男	ミラノ、仕立職人	10月27日	
ルイジ・ロッシ	24 男	ルガーノ、宿屋従業員	10月28、30日	
ルイジ・マジョッキ	24 男	ミラノ、独身	10月28日	
マリア・ソレリ	21 女	コモ、部屋女中	10月30日	
フィリッポ・リガンティ	48 女	ミラノ、主婦、材木商	10月30日	
ドミニク・マネガーリ	46 女	ミラノ、主婦、奉公人	11月3日	
ジセッペ・ガッリ	26 男	ミラノ、コモ、宿屋従業員	11月3日	○
ルイジ・マッシオレッティ	20 男	ミラノ、宿屋ボーイ	11月5日	
ジセッペ・レスティ	33 男	*ミラノ、厩舎長	11月9日、12月3日	○
テオドーレ・マジョッキ	28 男	*ミラノ、召使い、馬番	11月20, 21, 24, 26日	○
ジセッペ・サッキ	29 男	*ミラノ、元軍人	11月27~12月1日	○
マリア・トーナリ・マジョッキ	27 女	テオドーレの妻、洗濯婦	12月3日	
ジセッペ・アンドレム	43 男	ミラノ郊外、宿屋経営	12月5日	
ジェロラモ・パティステ・コロンボ	40 男	ミラノ	12月5日	
アレッサンドロ・フィニッティ	28 女	ミラノ、装飾画家	12月10日	○
カルロ・ランカッティ	48 男	ミラノ、菓子職人	12月10日	○
フランチェスコ・マラッティ	27 女	ルガーノ、主婦	12月10日	
ジョセフィーヌ・メンタスリ	30 女	ルガーノ	12月12日	
ユージェニオ・ボタッチ	36 女	トラリゴ、主婦	12月22日	
ピエトロ・クッキ	50 男	トリエステ、ホテル客室係	12月28日	○
マルク・ペルガンティ	30 女	ヴェネツィア、ホテル客室係	12月28日	
ジセッペ・ビアンキ	52 男	ヴェネツィア、ホテル客室係	12月28日	○
アントニオ・ロッシ	21 男	ルガーノ、宿屋従業員	12月30日	
フランチェスコ・ピローロ	41 男	ミラノ、料理人	1月5日(1819年)	○
パオロ・リニ	39 女	ジェシン州、主婦	1月20日	
ジェロラモ・グッジャリ	39 男	コモ	1月20日	
アントニオ・ヴァグリアヴィ	25 男	チャルノッビオ	1月22日	
ジェロラモ・ピアンキ	25 男	コモ	1月22日	
ジセッペ・グッジャリ	33 男	チャルノッビオ	1月22日	○
アントニオ・ピアンキ	38 男	コモ	1月22日	○
ジェロラモ・メジャニ	31 男	モンザ、著述家	1月23日	○
フランチェスコ・カッシーナ	35 男	コモ近郊、石工	1月25日	○
ガスパル・リヴァ	45 男	コモ近郊、石工	1月25日	
ジェロラモ・マニヨニ	32 男	ソッマ近郊、ホテル従業員	1月28日	
カルロ・ミノーラ	40 男	コモ、船頭	1月29日	
アントニオ・フェラリ	41 男	チャルノッビオ、石工	1月29日	
フランチェスコ・ラヨ・マッジョーレ	50 男	チャルノッビオ	1月29日	
アンリ・バジ	36 男	コモ近郊、石工	1月30日	
ジセッペ・ラゴ・マッジョーレ	24 男	チャルノッビオ、給仕	2月1日	

## ミラノ委員会における証人（続き）

アンゲ・ベルナスコーニ サミュール・ブルナティ パオロ・オッジョニ カルロ・カラノヴァ ジョヴァンニ・ルチニ ジョヴァンニ・リコ バティスタ・ヘレーニ ジャック・マガッティ フランチェスカ・バグリアベ ジョヴァンニ・バティスタ・リヴォルタ	56 男 59 男 33 男 41 男 40 男 37 男 45 男 35 男 37 女 28 男	チェルノッビオ, 大工 コモ近郊 *モンザ コモ近郊, 織布工 コモ近郊, 塗装師 コモ近郊, 船頭 コモ, 船頭 コモ, 船頭 ミラノ近郊, 主婦 コモ近郊, ガラス屋	2月1日 2月1日 2月1日 2月1日 2月1日 2月1日 2月1日 2月1日 2月2日 2月3日	○ ○
ジセッペ・トッリ ジセッペ・メラーティ パオロ・テッタマンシ ジセッペ・カルトシオ ルイジ・ガルディニ ラスカル・ファサンナ ジセッペ・チェルヴァディネ ジェロラモ・マルティネッリ ゲオルグ・コルティチエリ ドミニコ・ガッティ	29 男 55 男 48 男 44 男 41 男 22 男 23 男 26 男 45 男 26 男	チェルノッビオ, 石工 チェルノッビオ, 労働者 チェルノッビオ, 労働者 コモ, 織布工 コモ近郊, 建築工 チェルノッビオ, 織布工 チェルノッビオ, 織布工 チェルノッビオ, 召使い コモ近郊, ホテル業 コモ近郊, 石工	2月4日 2月4日 2月6日 2月6日 2月8日 2月8日 2月8日 2月8日 2月10日 2月10日	○ ○
ジェロラモ・フォンタナ フランチェスコ・ベンゾニ ドミニコ・ブルサ パオロ・ラガゾーニ アントニオ・ゲノリニ アンブロア・ビアンキニ ジェロラモ・バティスタ・ビアンキ アントニオ・リヴァ ジセッペ・ムッショニコ パオロ・ノセダ	24 男 43 男 40 男 25 男 20 男 33 男 32 男 29 男 33 男 25 男	コモ近郊, 石工 コモ, 荷担ぎ人夫 コモ近郊, 石工, 建築工 コモ近郊, 石工 コモ近郊 コモ近郊, 職人 コモ湖畔 コモ湖畔 コモ湖畔, 織布工 コモ湖畔, 織布工	2月10日 2月10日 2月11日 2月11日 2月11日 2月11日 2月12日 2月12日 2月12日 2月12日	○ ○
フェリックス・ポルタ ジャック・ネグレッティ ヴァーレンティン・カラディニ ジェネヴィエーヴ・ビロ オノラト・ミナ フィリッペ・バジ アンジェ・プロジェクト ルイーズ・デュモン バーバラ・クレス アネット・プレシンガー	62 男 35 男 46 男 50 男 34 男 38 男 38 男 25 女 24 女 28 女	チェルノッビオ, 船頭 コモ, 機材整備 コモ, 牧舎管理人 ヴェネツィアのホテル部屋係 ルガーノ, 石工 コモ近郊, 石工 ルガーノ, 石工 *スイス, 部屋付き女中 カールスルーエ, 召使い *女中	2月12日 2月15日 2月15日 2月16日 2月18日 2月18日 2月18日 2月2~27日 5月12日 5月12日	○ ○
モーリス・クレーデ ヴィンチェンゾ・ガルジーロ	25 男 男	*従者, 馬番 *帆船の船長（後日証言）	5月12日 12月23, 24, 29日	○

\* 従者として旅に同行した者。 ○貴族院の「裁判」においても証言した者。

出典 Royal Archives, George IV, Box 9/1, MSS., Report of W.Cooke and John Allan Powell, Appendix, B.C.D. Hansard's Parliamentary Debates, second series, vol.2 (1820), 804ff.

数含まれていた。そのうち二人が、妃の帰国後の貴族院における「裁判」で国王側が召喚した証人二六人のなかに含まれており、残りの五人のうち三人はイギリス人、他の二人（地中海を航行した帆船の持ち主、ヴィラ・デステのパン屋）は新たにロンドンに招いた者であった。なお記録によると、イタリアからロンドンに送り出された証人として、いざれもミラノ委員会で証言した三一人の名が記されている。マジョッキの妻など貴族院では証言しなかつた者も招かれていた事を示す。<sup>(90)</sup>

この証人のうち委員会側にとつてもっとも重要な人物は、部屋付き女中として妃に親しく仕えた黒髪の美女ルイーズ・デュモン二五歳であつた。彼女の証言は一九年二月一日から二七日まで、実質二一日間に及んだ。証言記録も、他の証人のものは要約の形であるのに対し、彼女のものは問答式で詳細にわたっている。しかし、デュモンが敬愛していた女主人を裏切つて証言するまでには若干の経緯があった。デュモンは一八一七年になると、その前年一一月から妃の廄舍係に雇われていた元軍人のジセッペ・サッキと親しくなつていて、一七年一月、キャラライン一行のローマ旅行中に、サッキが妃の財布から四〇〇ナポレオン金貨を盗んだことが判明したため、妃はすぐにサッキを解雇した。盗んだときデュモンが彼を妃の部屋に入れたことがわからず、デュモンも解雇して両親の元に送還した。この二人はその後しばらく同棲していた。また前述のようにデュモンの異父妹ブロンも部屋付き女中として働いていたが、妹の方はその後も仕事を続け、キャララインの帰国とともにイギリスに同行する。<sup>(91)</sup>

解雇された後は定職もなくミラノに住んでいたサッキ (Giuseppe

Sacchi 本人の言によればミラノではサッキニ *Sacchine* と呼ばれていた）は委員会の招きに応じ、一一月二七日～一二月一日にわたってかなり露骨な証言した。ヴィラ・デステで妃とペルガミがいつも腕を組んで歩いていた、旅の途中で妃とペルガミが手を取り合つて寝ているところを二・三回見た、馬車の中でペルガミが妃の首にキスしているのも見た、そのときペルガミのズボンははだけていたなどと。サッキは解雇されたことに対し、キャララインとペルガミに恨みを抱いていたことは次の事実から確実である。以下の史料は貴族院の「裁判」に備えて妃を擁護するため、指令を受けて二〇〇年八～九月に急遽ミラノ、ペーザロに急行し、告訴に対する反証を集めたジャベズ・ヘンリ（大法官府の司法官で元イオニア諸島の植民地裁判官）の報告に基づく。<sup>(92)</sup> フレイザーはヘンリーが妃を擁護する証人を多数ロンドンに連れてきたことは述べているが、ヘンリーが現地で集めた史料は、意図的にかほんど利用していない。

重要なのは当時歎医長を務めていたジョヴァンニ・ロッシによる証言である。解雇された翌日、ロッシの前に現れたサッキは妃とペルガミに対して「あいつらは邪悪なやつらだ」と脅迫めいたことを言い、デュモン嬢と深い関係になつたことでペルガミから非難され、解雇を言い渡された、自分は妃に報復するため剣をもつている、と言つた。ロッシは以前にサッキからデュモン用の薬の注文を受け、サッキが目の前でデュモンに手渡したことがあり、二人の親密さには気づいていた。だがサッキがそれまで妃とペルガミを尊敬し良い人だと言つてないので、驚いたとロッシは語つた。<sup>(93)</sup> ここで注意すべきは、サッキが解雇の理由を盗みにはまったく触れず、デュモンとの深入りした関係の

みをあげていることである。サッキの心中に、ペルガミを恨み、キャロラインとペルガミの間柄を暴露して報復したい、という情念が沸いていたに違いない。それゆえ委員会で証言するのはサッキにとって願つてもないことであつただろう。

サッキはさうに妃の身辺の世話係だった元愛人のデュモンを証人に呼び出すべく動いた。彼は証言を終えたその足で、ローザンヌの西外れコロムビア近郊の実家に帰っているデュモンのところに出向き（二月一〇日）、ミラノに証言に来るよう説得した。デュモンは躊躇した。そのような証言をすれば、まだ妃のそばで働いている妹が解雇される羽目になり、義父、母、異父姉妹の貧しい生活に逆戻りすることになる。姉妹は親元に仕送りをしており、証言に対する相応の報酬を要求しなければならない。このデュモンに対しサッキは説得を重ね、彼の言葉によれば「キケロのような雄弁」によつて誘い出すことに成功した。サッキは嬉々としてデュモン呼び出し成功の知らせをプラウン宛に送った。買収はしないと言つていたプラウンも、ローザンヌにいるサッキ宛にデュモンが証言にきてくれるよう要請した。<sup>(95)</sup>

ミラノに来たデュモンは、妃がペルガミと親しくなつたナポリ滞在のときから解雇されるまでの間にについて、ナポリ到着後しばらくたつて妃とペルガミが同じ食卓で朝食を取るようになった、ナポリでベッド・カヴァーに大きなシミがついていた、妃の寝室の大型ベッドに一

人以上が寝た跡があつた、ある夜ペルガミが下着とスリップ履きで妃の寝室に行くのを見た、など、多くのことを具体的に証言した。<sup>(96)</sup> デュモンは証言の途中で質問全部には答えられない、とプラウンに訴えたことがあつたが、結局プラウンの要請に負けた。委員会は証人の日当

を一日一〇ポンドと定め、デュモンには七三日分で七三〇ポンドを支払つた。これは委員会が証人へ支払つた最高額であつた。第二位は二〇日間で二〇〇ポンドのテオドーレ・マジョッキであつた。<sup>(97)</sup>

解雇された後、デュモンは妹ブロン宛の手紙（一八年二月八日付け）において、「自分がいま最も悲しみ後悔しているのは、妃殿下から辞職させられたことと、妃殿下が私の性格を誤解し恩を忘れて私が罪を課したこと」と述べ、不満を語つた。さらにその手紙で、彼女がキャロライン一行のテュニス、ギリシア、パレスティナへの旅行に関する旅行記（Journal）をローザンヌで出版したことに触れ、この旅行記が当地のゴーリサ夫人やイギリス人の間で話題になつてゐるが、その中でキャロライン妃は「この世界で最良の最も愛すべき妃殿下」であると書いてゐることに注目してほしい、私が妃殿下を「限りなく尊敬し、限りなく愛慕し、感謝の気持ちでいっぱいであること」を、妃殿下も理解されるよう期待している、と續々述べている。さらに妹への忠告を加え、妃のもとで働く間は結婚のことなど考へないよう、私の過ちを繰り返さないように、とも記した。<sup>(98)</sup> デュモンの心中には、妃に仕えていたときの良い生活、解雇されたことへの後悔と恨み、サッキとの関係、及び妹の問題が絡み合つており、サッキと金銭に誘われての証言であつたと言つて間違いない。

オムブテーダはデュモンの証言を得たのち、キャロラインのもとに仕えていたデュモンの異父妹ブロンからも証言を得ようとして、一九年二月～三月に任地ローマからペーザロの警察署長ビッチ宛に協力要請の手紙を出した。ビッチは買収金千ルイをほのめかしたそのような陰険な計画には関与できないと断り、その後まもなく三月一六日に才

ムプテーダがローマで急死したため、彼の暗躍もひいて幕を閉じた。妃のもとに、オムプテーダはキャロラインの暗殺あるいは毒殺を企んでいるという噂さえ伝わり、邸の炊事場や周囲の警備が強化されていた。<sup>(10)</sup>

.

いま一人の重要な証人はテオドーレ・マジョッキである。マジョッキはもとペルガミの配下であり、ペルガミの推挙により馬番として妃に仕えていたが、一七年一〇月、ベーザロ郊外ヴィラ・カブリ在住中に「他の召使いたちと喧嘩したため」(キャロラインのメモ記録による)解雇された。その後ミラノに住んでいたマジョッキは、ミラノ委員会及びのちの貴族院における証言で、キャロラインとペルガミとの「情交」の状況をまことしやかに証言し、当初はパウエルラ委員会と多くの貴族院議員に二人の不倫を確信させたほどであった。マジョッキの証言では、皇太子妃を中心としたヴィラにあたかもキャロラインとペルガミしか住んでいなかつたかのように、二人の関係だけが大写しにされた。しかし貴族院の裁判において、反対尋問に立った王妃派の弁護士ブルームが、妃らが住むヴィラにオムプテーダ男爵がきたことを覚えているか、と問うと、「知らない」と答え、男爵が合鍵を作つて召使いを妃の部屋に侵入させ、トラブルを引き起こしたこと尋ねられると、「覚えていない」(Non mi Ricordo)を繰り返した。

またヴィラに住むイギリス人について聞かれても、「覚えていない」であった。“Non mi Ricordo”は一種の流行語となり、次の二節を持つはやり歌もつくれられパンフレットにして撒かれた。<sup>(11)</sup>  
テオドーレ・マジョッキは私の名前  
そして誰もが知っている

私が王妃に背いて証言するため

イタリアから連れて来られたことを

外国でオムプテーダと会つて

ブラウン大佐のもとへ送られた

彼は“Non mi Ricordo”と言つたために  
たくさんのクラウン銀貨を私にくられた

まあまあ

ブルームの反対尋問により、貴族たちはマジョッキの証言が偽証ではないかという疑いを強く抱くにいたつた。八月二三日の議会でダーリントン卿は「刑罰法案を支持する最初の証人〔マジョッキ〕」が行った初日の証言は、正直なところ私の心に強烈な印象を与えました。しかし昨日行われた反対尋問は、逆にその印象を大いに弱めました」と語つた。後にマジョッキの偽証を確信したブルームは「マジョッキに対する反対尋問がこの法案を敗北へと大いに押しやつた」と述べた。<sup>(12)</sup>

マジョッキが貴族院に証人として現れたとき、キャロラインは興奮して「おおテオドーレ、裏切り者」と叫んで席を立つた。その後貴族院の「裁判」が最終段階を迎えていた一月八日、なおロンドンに残っていたマジョッキは、「善良な女性」として敬慕してきたキャロライン王妃宛に次の詫び状を書いた。「王妃様に背いて邪な罰当たりのことを述べたあなた様の罪深い召使いをお許しください。私は一〇〇〇ポンドの金錢での邪な証言をするようレステリ〔厩舎長〕に買収されました。私がしたことに心からお詫びいたします。わが虐げられた女主人様のお許しが得られるまで心を休めることができません」。<sup>(13)</sup>

マジョッキは明らかに偽証をしたのである。また妃のメモ書ではマジョッキは「他の召使いたちと喧嘩したため」解雇されたとのみ記されているが、ペルガミの配下にあった彼はペルガミが自分の賃金を引き下げようとしたと語っており、喧嘩の主要な相手は、それまで彼を引き立ててくれたペルガミではなかつたか、と推考される。マジョッキにはペルガミに対する妬みも渦巻いていたに違いない。レステリは証言者としては重要ではないが、ルイなる人物から三ヶ月分の給料を貰つて妃のもとを離れ解雇されたといつており、離れた時期はマジョッキと相前後している。オムブリーダの策謀で一六年八月に妃のもとに入ったレステリが、予定通りマジョッキを買収していたのである。買収されて妃を裏切つた者が、レステリをはじめ厩舎係ないし馬匹係に集中していたことも注目してよいだろう。

一八一八年一〇月以来、内密の調査を続けていたミラノ委員会は、翌年五月に計八五人の証人調査を終え、集めた膨大な証言集を緑の袋(Green Bag)に入れて持ち帰つた。クックとパウエルはその資料を整理し、七月一三日にその総括報告書(手稿二五ページ)を副大法官ジョン・リーチに提出した。膨大な証言を巧みに整理したこの報告書はペウエルが執筆しているが、筆者がその内容をつぶさに検証したところ、ペウエル自身が「最も重要な証言」と評価するデュモンの証言の比重が最も高く、次いでマジョッキ、他はかなり差があつてサッキらが来る。その他の証人はほとんどが個別の状況に関する証言である。こうみてくると反キャララインの重要な「証拠」を提供したのは、さきに述べたようにいずれも解雇され、ペルガミに嫉妬と反感を持ち、ペルガミと親密なキャララインに対しても反発し、報復心に駆

られた人々であり、かつ買収されていたと判断される人々であつた。彼らの証言は二人の関係の実態をどれほど正確に語っていたのだろうか。その証言が偽証性の高いものであつたことは疑いない。ミラノ委員会は総額三万ポンド以上を費やしたが、その大部分が証人たちに支払われており、まさに買収費として使われたのである。一方、この調査により摂政側は離婚のための証拠は整つたと確信した。

### 3 キャロライン妃の去就

ミラノ委員会の調査で「確信」をつかんだ摂政側の動きは陥しくなつた。一九年に入るとキャララインのもとに、彼女から王妃の地位を没収するための「私権剥奪法案」(Bill of Attainder) の準備が進められているというニュースが法律顧問ヘンリ・ブルームによって伝えられた。ブルームはキャララインがよりイギリスに近い場所に移ることを望んでいた。ブルームは一九年三月、キャララインの生活ぶりを確かめ経理状況を調査し助言するため、代わりに弟の弁護士ジェイムズ・ブルームをペーザロへ送つた。ジェイムズは三月初めからほぼ二ヶ月間、ペーザロ市街から一マイルほどの彼女の住居ヴィラ・ヴィットリアに滞在した。ジェイムズがロンドンの兄宛に送つた長文の報告(手紙)は、妃の生活の実態と心情を伝えており、妃の去就を確かめるために貴重な史料である。

まず妃の住居と住人たちについて。主要な住人はバロン(妃はペルガミのことを男爵と呼んでいた)、バロンとともに家令役を務めるオリヴィエリ大佐、馬匹係ヴァッサーリ大佐(二人とも誠に良い人物とブルームは評している)、バロンの弟ルイジ、歌手夫妻、オースティ

ン、五歳のヴィットリンであり、全体で八〇人、そのうち六三人はこの邸内に住んでいる。ペルガミ（三五歳くらい）は予想と違つて「誠に真っ直ぐなきわめて良い人物だと考える」。彼は長身で容姿もよく当地の皆から好かれており、嫌つているのは彼を妬んでいたミラノの銀行家マリエッティくらいで、経理にも通じヴィラの管理をみごとに行つていている。キャロラインは万事バロンに頼つていて、妃の負債が増大したのは、ナポリ在住期のシカードのルーズな経理、資金を管理するマリエッティが妃の承認なしに支出していたこと（この件でペルガミと対立）にあり、ブルームの調査ではペルガミの方が正しい、としている。ブラウンシュヴァイク公の遺言書が示した一万五千ポンドの妃の負債の問題は差し迫つた問題ではない。<sup>(10)</sup>

ミラノ委員会について、キャロライン妃はこの調査にひどくいらだつてゐる。彼女はオーストリア皇帝宛に調査をやめさせるよう要望を送つたとのことであつたが、それはやめた方がよいと忠告した。自分は妃が兄上たちの忠告を聞くのに便利なイギリス国内かブリュッセルに移つた方がよいと提案したが、使者をそちらに遣わす以上には動く氣はない。妃はミラノ委員会がデュモンを証人に引き出したことにひどく憤つてゐる。妃はデュモンの証言をもつとも気にしており、憤懣やるかたない様子である。妃によればデュモンは「大変な淫婦であり、その性格はよく知られているので、誰もその証言を信用しないだらう」と語つてゐる。ここにいる妹のブロンに姉を連れてくるよう言つてゐるが、デュモンは来ようとしない。<sup>(11)</sup>

キャロラインの今後について、シャーロットが急逝するずっと前から彼女は二度と帰国しないと決めていたが、いまその決心が固まつ

た。妃は王妃になる野心はないと言つて、もし親しい義弟のヨーク公が即位するようなことがあれば、彼に敬意を表するためイギリスに行つてみたい、とのことである。何よりも平穏に暮らすことを望んでゐる。妃はここでとても幸せそうに見える。「明白な証拠はまったくないが、あらゆる点から見て二人〔妃とペルガミ〕は夫と妻であるかのように見える」。バロンの部屋は妃の部屋に近い。見たところ誰の目にも明らかのよう見えるが、彼女の反逆罪を証拠立てるのは難しいだろう。だが状況証拠が洗いざらい述べられたならば、彼女は破滅の底に落ちるだろう。国王は妃を離縁し、彼女が望んだとしても、王妃の座には就かせないだろう。したがつて妃の今後の生き方として、年五万ポンドの年金を生涯確保し、王妃の地位には就かず公式に別居する、というような取り決めを結ぶことが考えられる。ジェイムズはこのような主旨を述べ、キャロラインが頼りにしてゐる有能な法律家、兄ヘンリー・ブルームのアドヴァイスを求めてゐる。<sup>(12)</sup>

事実、兄ヘンリーはその趣旨を、一 キャロラインは離婚ではなく公式に別居することに同意する、二 今後王妃に就く権利は放棄しヨンウォール公爵夫人というような肩書きを用いる、三 妃の年金は生涯保証される、という三項目にまとめ、六月一四日ハッチンソン卿を通して摂政殿下に提案したが、殿下は公式な離婚を要求し受け入れなかつた。<sup>(13)</sup>

ミラノ委員会の報告が提出され、離婚を押し進めようとする摂政の意向がブルームから伝えられた一九年七月以降、キャロラインは落ち着けなくなつた。ジェイムズの報告とは異なり、彼女の内心には王妃の地位への未練が、あるいは離縁され代わりの女性が王妃の座につく

ことへの懸念が渦巻いていたに違いない。八月には馬具などを注文し、キャロラインがベーザロを離れる準備をしているという、数週間前に同地を訪れた旅人によるニュースが報ぜられた。<sup>(1)</sup> またケンジントン・パレスに住んでいる執事シカード宛に、妃が目下ベーザロからイギリスへ向つてるので、セント・レガーフ卿にカレーまで来てほしい、またガース嬢とセント・レガーフ卿にはドーヴィーでお会いしたので伝えてほしい、さらにケンジントン・パレスに住めるよう手配してほしい、という手紙が届いた、と半信半疑に報じられた。<sup>(1)</sup>

この時期のキャロラインの動きはブルームら少数の関係者にしか知られておらず、記者にとっては謎と思われたが、彼女は確かにオルディ公爵夫人の名でバスポートを取得し、八月には侍従たちとともに密かにペザロを離れ、ボローニアを経由してリヨンに向かっていた。

マルセイユ発一二月二六日付けの妃の手紙は次のように述べる。五年もの長い間親しいイギリスを留守にしているが、イギリスの人々の私に対する変わらぬ親愛の気持ちが伝わってきて、幸せな気分に浸っている。「イギリスにいる私に対する中傷者や敵たちは、またもや、スペイや悪い行為のため私の邸から追放された多くの元召使いを使つて、ミラノで内密の調査を始めている」。クックらは私の私生活のすべてを調べてきた。またも内密の調査を始めるという情報はすでに昨年四月に私の法律顧問ブルームから知られ、そのとき私はロンドンとの意向であった。そのためリヨンにきて、同地で数週間待機したが、リヨンは自分には寒過ぎ、冬期の住居を求めてマルセイユに移っている。しかしこう思つたが、彼は私に自制を促し、まずフランスで会いたい

「ジョージ三世」の健康が悪化していると聞きとても衝撃を受けている。……イギリスとイタリアでの負債をすべて支払い終えて喜んでいることをお伝えしたい、と。彼女は真剣に帰国を考えていたのである。

当初はしばらくリヨンに滞在し、ブルームの到着を待つて今後の身の振り方を相談する計画であった。しかしブルームからリヨンまでは行けないと連絡があり、パリに出向くことを考えた。だが二〇年一月六日付けの手紙によると、今朝パリの旧友から来信があり、在パリのイギリス大使は私に対し敬意を払うことはできないと主張し、パリの政府も妃に住居を提供できないのではないか、と述べたとのことである。フランスの現国王は悲惨な亡命中には亡き父ブラウンシュヴァイク公に暖かく迎え入れられたのに。このような国には長く滞在できないので、一月二〇日にはマルセイユを発つて海路イタリアへ帰る、と書かれていた。<sup>(1)</sup>

マルセイユを発つた彼女はサヴォナ、ジェノヴァをへてリヴォルノ（英名レグホーン）で上陸し、ピサ経由ローマに向かつた。リヴォルノに到着して、ジョージ三世の逝去（一月二九日）を伝えるブルームの手紙を携えた執事シカードに出会つた。彼女は「シカード氏と出会つたとき、私がどれほど驚いたかあなたにはおわかりにならないでしょう」とローマ発二月二三日付けの親友宛の手紙に書いた。<sup>(1)</sup> 夫の摂政殿下はジョージ四世として即位したので、彼女は当然ながら王妃の地位についたはずであったが、イギリス政府からの公式な連絡はいつさしこなかつた。ブルームは、イギリスに帰国する前にブリュッセルからレーで相談したいという意向を伝えてきたが、キャロラインは長い旅行の後なのでしばらくローマで休息したい、その後できれば海路でイギ

リスに帰りたい、と認めた返信をシカードに託し、さらに帰国後はグリーン・パークの故シャーロット王妃の住居クイーンズ・パレスに住みたいので、手配するようブルームに要求した。<sup>(11)</sup>

しかし問題はこのキャロラインの「王妃」という称号にあった。イ

ギリス政府はこの問題で諸国の政府に、王妃の称号を認めるという通知をいっさい出そうとしなかった。それどころか、国王と政府はキャロラインから王妃の地位を剥奪するため、国教会の祈禱書から彼女の名前を削除する作業を進めていた。カンタベリ大主教サトンはこの国王の要請に反対であったが、ミラノ委員会後にはリヴァプール内閣はその方針をやむなしと考えるようになり、二〇年二月一〇日、内閣は祈禱書からの削除を公式に認めたのである。ローマに着いたキャロラインは教皇厅に対し、夫が即位したので自分を王妃として遇するよう要求したが、枢機卿はイギリス政府とハノーヴァ当局から公的な通知を受けたならば王妃として敬意をもって遇したいと答えた。<sup>(12)</sup>キャロラインは三月一日には「イギリスへ飛んでいきたい」と親しい友人宛に書いたが、四日後には、ローマの教会で前国王の逝去以降、若い司祭がイギリス人に向かって、ジョージ四世と王妃キャロラインのために祈りの言葉を語っていることを書き送った。

王妃の名前を祈禱書から削除するという前代未聞の問題は、もとより庶民院で論議を巻き起こし、この措置を不当とする意見が多数を占めた。しかし国王はカースルリー外相を通じて密偵オムブテークに指示していたとおり、祈禱書からの削除と王妃の称号を認めないことには、まったく譲歩しようしなかった。国王側がいくらかの譲歩を見せ最後的に示した案は、キャロラインが国外で暮らすならば、王妃の

称号並びに王族にかかる称号は認めないが離縁などの措置はどちらにい、また生涯にわたって年額五万ポンドの年金を保証する、しかもしもし帰国するならば、不義密通の罪で妃に対する刑罰法案を通過させ、離婚を断行する、というものであった。<sup>(13)</sup>

四月にペルガミ、ヴァッサリ伯爵、オルディ公爵夫人、マリエッテ・ブロンらを連れてペーザロを発ち、イギリスへの帰国の旅についたキャロラインは、ブルームからカレーに近いセント・メールで待つよう連絡を受けた。六月四日、同地で右のような国王側の提案をまとめたハッチンソン卿の文書を、卿に同行したブルームから見せられたとき、キャロラインは興奮し「このような提案を聞きいれることはまつたくできない」との文を認め、ハッチンソン卿に届けさせ、直ちに帰国することを決断した。ペルガミ、ヴァッサリとはここで別れ、彼女は支持者のロンドン市長ウッドやアン・ハミルトンに伴われ、直ちにカレーに向かった。<sup>(14)</sup>王妃がドーヴィアに着いた翌六月五日以来、圧倒的多数の国民、民衆がキャロライン側につき、各地で王妃の帰国を祝賀する賑々しい示威行動が繰り広げられた。この六月から貴族院の「裁判」が行われた一一月にかけて、「キャロライン王妃事件」は大衆の感情を徹底して興奮させ、商売のことも個人の楽しみさえも忘れさせ、「食事さえも二の次」になるほど国民大衆を熱中させたのである。<sup>(15)</sup>

む す び

キャロライン妃は一八一四年八月にイギリスを発ち、実家ブラウンシュヴァイクに向けざらにイタリアに向けて出国した。それは妃の側

からの娘シャーロットとの面会を厳しく制限し、○七年六月四日のジョージ三世の誕生祝賀会を最後に、彼女との面会をいつさい拒否してきた夫ジョージとの間の「平和を取り戻す」ための、他方、皇太子妃としての誇りを傷つけられた数々の「不名誉と屈辱」と「虐げられた」境遇からの解放を求める旅出であった。以来五年半を超えた大陸旅行、パレスティナ方面への冒險旅行とイタリア生活において、彼女は確かにそれまでの鬱屈した生活から解放され、生氣を取り戻すことができた。しかし自由と解放をかち得たその大陸旅行がまた、彼女の悲劇を決定的なものにした。夫の指図による密債が彼女の行く先々を追いかけ、召抱えた近習、従者を買取して彼女をおとしめる情報をかかり集め、侍従として信頼し頼りにするようになつた元イタリア軍人ペルガミとの「不義」の物語がつくり出された。

確かに彼女の冒險旅行と大陸生活を考えてみると、皇太子妃としては、常軌を逸した途方もないと思われることが少なくなかつただらう。彼女とペルガミとの間の真実は、本人が真相を明かさないかぎり不明というほかないが、ジェイムズ・ブルームが述べたように状況証拠は確かに揃つていた。彼女は一般人とも気さくに付き合い、気取らない闊達な性格の持ち主であつたし、虐げられた状態が続くなかで夫に従順に従う女性ではなくなつていて、何人の著者や筆者が、彼女について「御しがたい」(unruly)とか、「おてんば娘」(hoyden),あるいは「分別のない」(indiscretion)という批判的評語を用いたのも故なしとしない。<sup>(11)</sup> 彼女は皇太子妃としては確かにいくつもの欠点の持ち主であった。

しかしキャロラインは一七九五年四月に嫁いできた当初から、「御

しがたい」「分別のない」「おてんば娘」であったのだろうか。彼女の悲劇はその結婚とともに始まつた。従兄弟である夫ジョージは、その九年以上前の八五年一二月一五日、二三歳で司祭の立ち合いのもと六歳年長のカトリック教徒フィッツハーバート夫人(未亡人)と密かに挙式しており、以来「最愛の妻」と呼んで同棲していた。だがこの秘密の結婚は公式にはまったく認められないものであつた。なぜなら、一七七二年の王室結婚法では二五歳以下の王族の結婚には国王の許可が必要と定めており、また名譽革命以来カトリック教徒はその配偶者から排除されていたからである。皇太子は當時ほかにジョージ・公爵夫人とも親密な間柄にあり、嫁いできたキャロラインを悩ませた。ジョージがキャロラインとの結婚を決めた理由は、正式の妃を得て世継ぎを得ること、それにより積もりつもつた彼の膨大な借金を議会が負担してくれるを見込んだからであつた。結婚の翌年に九ヵ月でシャーロット妃が生まれた数日後、夫は酩酊して長文の遺書を書き、その一節で「皇太子妃といわれてゐる女性に一シリングだけ遺す、フィッツハーバートにわが全財産を贈与する」と認めた。<sup>(12)</sup>

より衝撃的なのは、婚約が決まつた九四年秋にジョージがキャロラインに宛てた手紙である。それは以下のように述べていた。もうあなたは私のところに嫁入りしてくることが決まつた、自分はこの結婚を押し進める動かしがたい力に従わざるを得ないが、それは私を絶望へ落とし込む。率直に申し上げるが、あなたはこの縁談をまだ断ることができるので、この婚約を破棄してほしい。私はあなたを愛せないし、幸せにすることもできない、私は他の女性を愛しているのです。

を棄てます。公の場では一度とあなたと会わないとやうやく。そして私は愛している女性のところに行き一緒に暮らします。お嬢さん、これが私の最終的な取り消せない結論です。<sup>(1)</sup>」のふたな身勝手な「決定」に対し、キャロラインは「私の義務はなんぞやうござんし、私に課せられた捷を破る力もその願望もありません。ですから、私は指令する権限をもつておられる方の希望に従ふことに決めました。同時にあなた様が言われてくる怒らしく結果にも従ふます。しかしそのような苦痛を与えられた人の心中をお察しになりませば、あなた様もそのような残酷な取り扱い方に對し、おそらく良心の回責を感じられぬ」とやうやく<sup>(2)</sup>返信を書いた。<sup>(3)</sup> 1人の結婚生活ばかりの手紙通りにそれを実践する形で展開したところになり、キャロラインの悲劇は真に不自然な婚約のときから始まっていたのである。心地よい下りて一八三〇年六月、キャロラインよりほぼ九年遅れてシヨーニ田世が他界したと、『タイムズ』は悲劇の後三週間の状況をみて冷静な立場から、快樂に明け暮れたシヨーニを次のように語った。「君のたび他界した国王ほど、同胞だから哀悼せられた人はござなかつてなかつた」。

本稿で検証したよんだ、キャロラインの「不義」の物語は元は小説<sup>(4)</sup>、<sup>(5)</sup> または密偵オペラ<sup>(6)</sup>、テアトード男爵らが創作した虚構であり、明治や明治へ至る前でキャロライン妃に背ひて妃の「不義」をめぐらしくかに詔言した主要な証人たちは、悪事を犯して妃から解雇された者だねか、または金銭で買収された卑しい者たちであった。貴族院の「裁判」においてブルームの反対尋問がそのかなりの部分を明かにしたが、彼らの証言は虚構に富み、偽証に近いものであった。母の唇に囁んで

## 補

(1) *The Times*, 17 May 1817, p. 4. Lewis Melville, *An Injured Queen, Caroline of Brunswick*, 2 vols. London, 1912, vol. 2, pp. 312-14.

(2) Lord Liverpool to the Princess of Wales, 28 July 1814, Melville, vol. 2, pp. 314-16. Lady Charlotte Bury, *Diary of A Lady-in-Waiting*, ed. by A. Francis Stewart, 2 vols. London, 1908, vol. 1, pp. 404-05.

(3) The Princess of Wales to Lady Charlotte Campbell, 29 July 1814, L. Melville, *op. cit.*, vol. 2, pp. 320-22.

(4) *Times*, 10 August 1814, p. 4. Robert Huish, *Memoirs of Her Late Majesty Caroline, Queen of Great Britain*, 2 vols. London, 1821, vol. 1, pp. 580-82.

(5) *Times*, 17 May 1817, p. 4. Melville, vol. 2, pp. 316-19.

(6) Samuel Whitbread to the Princess of Wales, 1 Aug. 1814, Melville, vol. 2, p. 320. ネーベル・スコットは「ナサニエル・ホーリー」。

(7) *Hansard's Parliamentary Debates* [Hansard], vol. 27, June 1814, 1050-53. The Letter of the Queen to the Princess of Wales, 23,

25, 27 May 1814. Melville, vol. 1, pp. 243-44ff.

(8) A. Aspinall, ed., *The Letter of King George IV*, 3 vols. Cambridge, 1938, vol. 2, Jan. 1815-Jan. 1823, p. 278.

(9) *Hansard*, second series, vol. 2 (1820). 瑞穂「キャロライン王妃の貴族院の『裁罪』」『忠誠』日本版、平成11年。

(10) Graziano Paolo Clerici, *A Queen of Indiscretions, The Tragedy of Caroline of Brunswick, Queen of England*, translated by Frederick Chapman, London, 1907 (Italian edition, 1904), Introduction,

- (口) Lewis Melville, op. cit.
- (口) Sir Edward Parry, *Queen Caroline*, New York, 1930, pp. 11-12.
- (口) 廣田武太の「参照」及び本歌が作品の構造や本文を記述する場合の例。  
*Joseph Nightingale, Memoirs of the Public and Private Life of Queen Caroline*, London, 1820, the Folio Society edition by Christopher Hibbert, London, 1978. Wm. Dodgson Bowman, *The Divorce Case of Queen Caroline, An Account of the Reign of George IV and the King's Relations with other Women*, New York and London, 1930. Howard Coxe, *The Stranger in the House, A Life of Caroline of Brunswick*, New York, 1940. Joanna Richardson, *The Disastrous Marriage*, Jonathan Cape, 1960. Roger Fulford, *The Trial of Queen Caroline*, London, 1967. Lord Russell of Liverpool, *Caroline, the Unhappy Queen*, London, 1967. Thea Holme, *Caroline, A Biography of Caroline of Brunswick*, London, 1979. Alison Plowden, *Caroline and Charlotte, The Regent's Wife and Daughter, 1795-1821*, London, 1989. E. A. Smith, *A Queen on Trial, The Affair of Queen Caroline*, Alan Sutton, 1993. Stephen C. Behrendt, *Royal Mourning and Regency Culture, Elegies and Memorials of Princess Charlotte*, London, 1997.
- 作品原本の構成にひらくべき文を参照。書簡「キャロライナ出没地を記す」(1100年)。
- (口) Rohan McWilliam, *Popular Politics in the Nineteenth Century England*, London, 1998. 桜井綾川訳『19世紀キャロライナの政治と政治文化』(1100年)。
- (口) A. Aspinall ed., *The Correspondence of George, Prince of Wales, 1770-1812*, 8 vols., London, 1963-71. ditto., *The Letters of King George IV, 1812-1830*, 3 vols., Cambridge, 1938.
- (口) Flora Fraser, *The Unruly Queen, The Life of Queen Caroline*, London, 1996.
- (口) Nanora Sweet, ““The Inseparables”: Hemans, Browns and the Milan Commission”, *Forum for Modern Language Studies*, 39-2,

April 2003, pp. 165, 175.

- (口) 11月1日リチャードソンが書簡の翻訳を用いて手紙を議論が読み上り、「ヨーロッパの政治家は、キャロライナに理解を示す多くの議員の発言が述べられ、議論の模様が『タイヤーズ』に示される」。身長王妃の「豊かな才覚」が広く国民に感動するようになつた。Hansard, vol. 24 (1813), 982-1128, 1131-55, vol. 25 (1813), 113-200ff.
- (口) Hansard, vol. 27 (1814), 1048-53.
- (口) The Princess of Wales to George Canning, 3 Aug. 1814, L. Melville, vol. 2, pp. 322-24.
- (口) George Canning to the Princess of Wales, 5 Aug. 1814, Melville, op. cit., p. 324.
- (口) The Princess of Wales to Lady Charlotte Campbell, 7 Aug. 1814, Melville, pp. 324-26. Lady C. Bury, *Diary of A Lady-in-Waiting*, vol. 1, p. 270. 終戦記録(1815年)を参考。
- (口) *The Letters of King George IV*, vol. 2, “Copy of the Queen's Narrative, partly from Her M's dictation”, p. 347.
- (口) Melville, vol. 2, pp. 327-330.
- (口) Lady C. Bury, vol. 1, pp. 274-75.
- (口) Letter to Lady C. Campbell, Melville, vol. 2, pp. 330-31, 339-42.
- (口) Hansard, second series, vol. 2 (1820), 1111ff, 1230-34.
- (口) Letters of King George IV, vol. 2, p. 347.
- (口) Ibid., pp. 347-48. 記(口)を参照。
- (口) Melville, vol. 2, pp. 348-52.
- (口) The Letters of King George IV, v. 2, p. 348.
- (口) Hansard, second series, vol. 2 (1820), 806ff.
- (口) R. Huish, v. 1, pp. 594-95.
- (口) Ibid., pp. 595-96.
- (口) Pss of Wales to Lady Campbell, février, 1815, Melville, v. 2, pp. 339-42.
- (口) Pss of Wales to Miss Berry, 23 March, 1815, in Clorinde, Mel- 83

- ville, v. 2, pp. 345–47. Edward Parry, pp. 214–15.
- (3) Melville, v. 2, pp. 348–50, G. P. Clerci, pp. 78–79.
- (3) Thea Holme, pp. 156–57.
- (3) Royal Archives, Geo. IV, Box 9/1, Report of William Cooke and John Powell, 13 July, 1819, p. 5. *Hansard*, vol. 2 (1820), 1123–24.
- (3) Royal Archives, Box 9/1, Report of W. Cooke..., p. 6. *Hansard*, vol. 2 (1820), 1124–25. Clerci, p. 78. Melville, vol. 2, pp. 380–81.
- (3) Royal Archives [RA], Box 9/1, Report of Cooke..., p. 6.
- (4) F. Fraser, pp. 276–77.
- (3) *Times*, 21 Aug., 1815, p. 3. Clerci, p. 83.
- (3) 『第二回』の論述を参照。 RA, Geo. IV, Box 13, Evidence under the Second Head, no. 1. Box 13/(1)54.
- (4) *Hansard*, vol. 2 (1820), 1266ff.
- (5) *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 349. Clerci, p. 93.
- (6) Huish, v. 1, pp. 602, 606.
- (7) T. Holme, pp. 164, 187.
- (8) Fraser, pp. 283–84.
- (9) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke..., p. 13. Huish, v. 1, p. 617. Holme, p. 166.
- (3) *Times*, 15 Aug., 1816, p. 3. *Letters of King Geo. IV*, vol. 2, p. 350. Huish, v. 1, pp. 618–26. Melville, v. 2, p. 356, Fraser, pp. 284–85.
- (6) Huish, v. 1, pp. 626–30.
- (3) *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 350. Huish, v. 1, pp. 631–32.
- (3) Huish, v. 1, pp. 633–36ff, 345.
- (4) *Hansard*, vol. 2 (1820), 889–900, 915–23.
- (3) *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 350.
- (6) Huish, v. 1, p. 646.
- (3) Huish, v. 1, pp. 655–58.
- (3) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke and Powell, pp. 4–6.
- (3) Huish, v. 1, pp. 672–76. *Times*, 29 April, 1817, p. 3.

- (3) Lord Castlereagh to Lord Stewart, Most Private and Secret, 21 Jan. 1816, E. Parry, Appendix I, p. 329 ff.
- (6) Huish, v. 1, pp. 679–80.
- (3) *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 272.
- (3) RA, Georgian Additional, MSS, 21/102, 27, 10 May, 1819.
- (3) Lady Anne Hamilton, *Secret History of the Court of England, from the Accession of George the Third to the Death of George the Fourth*, London, 1832, pp. 117–19. Parry, pp. 211–15.
- (3) Parry, pp. 213–19.
- (3) RA, Geo. IV, Box 9/3, 3)a Vice Chancellor's Original Report, p. 8.
- (3) *Times*, 17 May, 1817, p. 4. *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 349. Huish, v. 1, pp. 659–60. Clerci, p. 84.
- (3) 植(3)参照 Parry, Appendix I, pp. 329–31.
- (3) Stewart to Castlereagh, Private and Most Secret, Milan, 28 Feb. 1816, Parry, Appendix I, pp. 331–38.
- (3) RA, Geo. IV, Box 13/53-no. X. *Letters of King Geo. IV*, v. 2, p. 350. Clerci, pp. 101–06.
- (3) M. Crede to the Chevalier Tomassia, *Times*, 7 Oct., 1820, p. 4. Huish, v. 1, pp. 661–62. Melville, v. 2, pp. 386–87.
- (3) RA, Geo. IV, Box 9/3, pp. 4–6.
- (3) *Times*, 26 March, 1817, p. 3.
- (7) Ibid. and 31 March, 1817, p. 3.
- (5) Ibid., 4 April, 1817, p. 3.
- (6) Ibid., 25 Sept. 1820, p. 3.
- (7) RA, Geo. IV, Box 9/3, pp. 6–7.
- (3) *Hansard*, vol. 2 (1820), 969–73, 975 ff.
- (3) RA, Geo. IV, Box 9/3, p. 7.
- (3) “Journey of an English Traveller, or remarkable Events and Anecdotes of the Princess of Wales from 1814 to 1816”, *Times*, 20 May, 1817, p. 3.

- (5) *Times*, 7 Nov. 1817. 报道「スキーイー王女の夭折 やの事件・騒動  
～民衆一斉ナロハトマ王妃事件研究」京都女子大学大学院文書研究科紀要  
『歴史』11中'11〇11年11月。
- (6) Holme, pp.184-85. *Letters of King Geo.* IV, v.2, p.282.
- (7) RA, Geo. IV Additional, MSS 21/102, 24 C.
- (8) RA, Geo. IV, Box 13/53, no.IX. L.C.Bury, v.2, p.146. ハハタ  
ヨルモロウタタリカツシ cf. Melville, v.2, pp.365-66.
- (9) Pss of Wales to a Friend, [1818], Melville, v.2, pp.408-09.
- (10) *The Examiner*, 9 Nov.1817. *Black Dwarf*, 12 Nov.1817. Samuel  
Bamford, *The Autobiography of Samuel Bamford*, 2 vols., 1839-  
1841, 6th edn 1967, pp.29-39. 前掲報道「スキーイー王女の夭折」
- (11) RA, Geo. IV, Box 23/3-51.
- (12) RA, Geo.IV, Box 23/3-51. *Letters of King Geo.* IV, v.2, pp.252-  
53. Fraser, pp.304-05.
- (13) Pss of Wales to a Friend, 26 Dec. 1819, Melville, v.2, pp.396-97.  
Huish, v.2, p.12.
- (14) RA, Geo. IV, Box 9/1, B-C. *Hansard*, second series, 1820, vol.1  
~2.
- (15) RA, Geo. IV, Box 13/57, A List of some of the people examined  
as far as we know. G.Sacchi & L.Dumont.
- (16) RA, Geo. IV, Box 13/2, 51, Letters relating Mr.Henry.
- (17) Fraser, pp.401, 428-30.
- (18) RA, Geo. IV, Box 13, Evidence under the Third Head, no.V,  
83-86, Pesaro, 29 Sept. 1820.
- (19) RA, Geo. IV, Box 23/69, G.Sacchi to Brown, 16 Dec. 1818,  
Brown to Sacchi, 29 Dec. 1818.
- (20) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of W.Cooke and J.Powell, pp.  
2-4, App. (82); Box 9/2, Bundles of Lists and examinations of  
witnesses, (82) Dumont.
- (21) RA, Geo. IV, Box 23/10, Expenses in Milan Commission.
- (22) Demont to Bron, 8 Feb. 1818, RA, Geo. IV, Box 13/4-57. *Hansard*

- sec. ser., v.2 (1820), 1221-32. L.Demont, *Journal of the Visit of  
the Princess of Wales to Tunis, Greece, and Palestine*, 1818.
- (23) *Times*, 31 Oct. & 3 Nov.1820, p.3. Melville, v.2, pp.390-92. RA,  
Geo. IV, Box 13, Evidence under the Fourth Head, XXXVIII.
- (24) *Letters of King Geo.* IV, v.2, pp.280-81.
- (25) Ibid., Melville, v.2, pp.478-79.
- (26) Ibid., pp.480-81, Holme, p.199.
- (27) *Hansard*, sec. ser., v.2, 869-70. cf. Marcus Wood, *Radical Satire  
and Print Culture, 1790-1822*, Oxford, 1994, pp.150-54.
- (28) Ibid., 804.
- (29) *Letters of King Geo.* IV, v.2, p.860. *Hansard*, sec. ser. v.2, 933  
-37.
- (30) *Hansard*, sec. ser., v.2, 1252-53.
- (31) RA, Geo. IV, Box 9/1, Report of Cooke and Powell, pp.1-25.
- (32) James Brougham to Henry Brougham, March, 1819, *Letters of  
King Geo.* IV, v.2, pp.272-85.
- (33) Ibid., pp.272-76, 277-78.
- (34) Ibid., pp.278-79.
- (35) Ibid., pp.280-85.
- (36) Ibid., p.284.
- (37) *Times*, 31 July, 1819, p.2.
- (38) *Times*, 13 Aug. 1819, p.2.
- (39) Huish, v.2, pp.11-13. Melville, v.2, pp.394-96. *Times*, 24 July,  
1819, p.3.
- (40) Huish, v.2, pp.15-16. Melville, v.2, pp.396-97.
- (41) Caroline to a Friend, 23 Feb., 1820, Melville, v.2, p.398.
- (42) Caroline to Gell, 3 March, 1820, RA, Geo. IV, Add. MSS, 21/  
102, no.36. Melville, v.2, pp.398-99, 401.
- (43) Caroline to Gell, 29 March, 1820, RA, Geo. IV, Add. MSS, 21/  
102, no.35. Huish, v.2, pp.16-18. Melville, v.2, pp.400-01.
- (44) Pss of Wales to a Friend, 2,6 March, 1820, Melville, v.2, pp.

- (三) 久々の高貴な女性の紹介(3)(3)の歴史的背景。Huish, v.2,  
pp.58-60.
- (三) Huish, v. 2, pp. 60-62ff.
- (三) William Hazlitt, "Common Places", no. 23, 1823, in *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. by A. R. Waller and Arnold Glover, 12 vols, London, 1904, vol. 2 p. 554.
- (三) "unruly" by F. Fraser, "indiscretion" by G. P. Clerici and others, "hoyden" by *The Companion to British History*, by Charles Arnold-Baker, 2nd. edn., London, 2001.
- (三) *The Correspondence of George, Prince of Wales*, v.1, a facsimile in front page.
- (三) Ibid., v.3, p.132.
- (三) Copy of a letter written to the Princess Caroline of Brunswick by George, Prince of Wales, in Lady Ann Hamilton, *Secret History of the Court of England*, p. 44.
- (三) Copy of the reply to George, Prince of Wales from Caroline, Princess of Brunswick, in Lady Ann Hamilton, p.47.
- (三) *Times*, 16 July, 1830, p. 3. E. A. Smith, *George IV*, Yale U.P., 1990, p.273.
- (三) Dormer Creston, *The Regent and His Daughter*, London, 1932, p.253. Christopher Hibbert, *George IV, Regent and King*, 1811-1830, London, 1973 p. 96.